STIR

ステア ISSN-0286-3634
1986 AUTUMN VOL.21

世界のホテル・バー 20

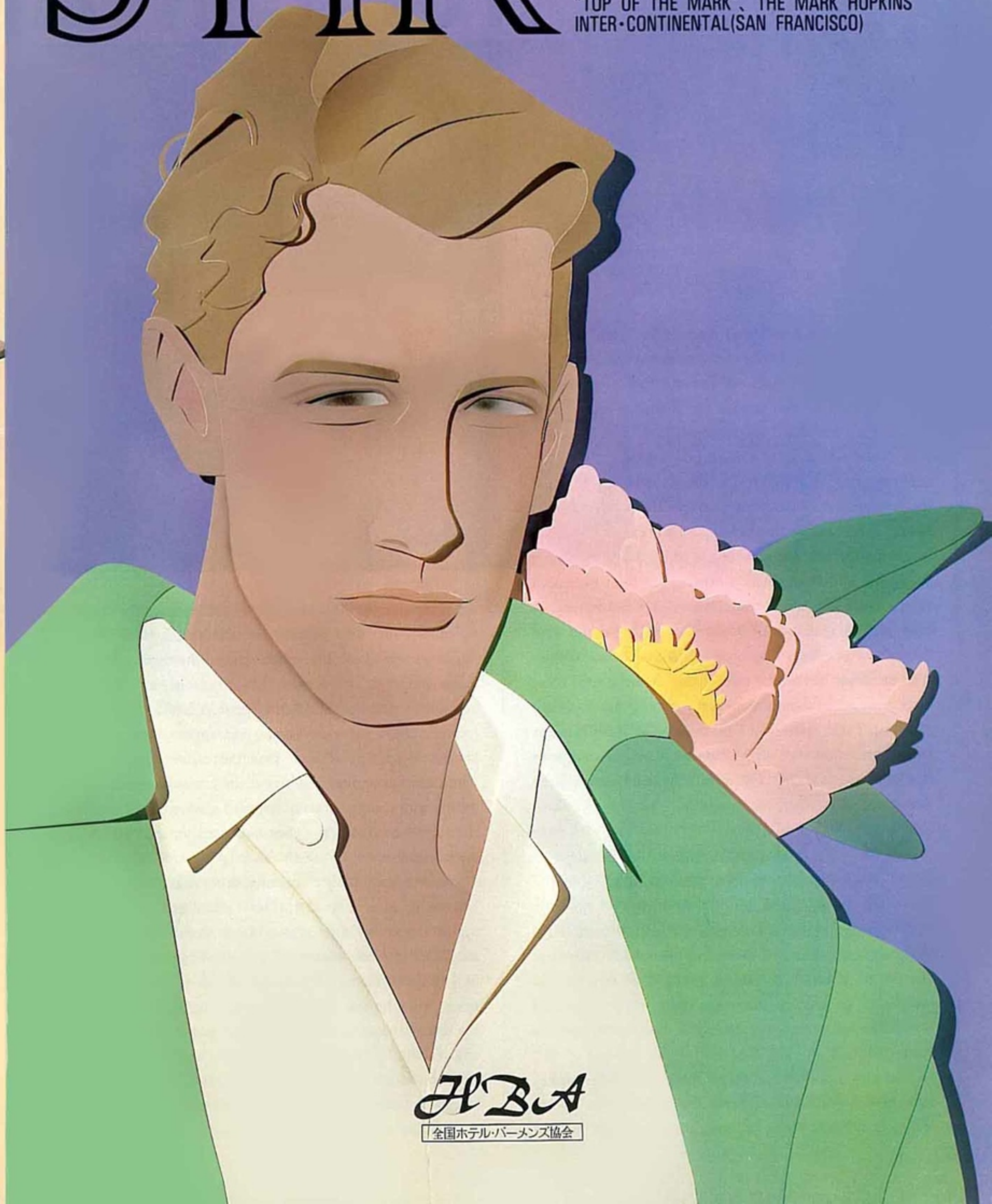
"トップ・オブ・ザ・マーク" ザ・マーク ホプキンス
インターコンチネンタル(サンフランシスコ)

STIR

ISSN-0286-3634
1986 AUTUMN VOL.21

HOTEL BAR IN THE WORLD 20

"TOP OF THE MARK"、THE MARK HOPKINS
INTER・CONTINENTAL(SAN FRANCISCO)



HBA
全国ホテル・バーメンズ協会

CONTENTS

STIR――――――1986 AUTUMN VOL.21

1 巻頭特集
テーマエッセイ「正しい」

12 Fragrance of Spirits and Talks ステア対談
徳間康快VS名取裕子

17 STIR ESSAY 酔狂雑記―21
「魚の味」近藤啓太郎

18 BEYOND THE HORIZON 地平線綺譚―16
「未知なるものへ」三輪主彦

20 世界のホテル・バー―20
"トップ・オブ・ザ・マーク、
TOP OF THE MARK"
THE MARK HOPKINS INTER・CONTINENTAL

30 for a NIGHTCAP

32 HOTEL―BAR IN THE WORLD―20
"TOP OF THE MARK"
THE MARK HOPKINS INTER・CONTINENTAL

■アレキサンダー

琥珀という色のもつ風合いには、何やらぬくもりにも似たものがひそむ。西洋のきらめくが如き光とは別の、東洋の玉の光沢には存在感がある。鋭く研ぎすまされ、緊張感に満ちた世の中には、そうした安堵感にも似た重厚なものに魅せられるのも人の常であろう。とっぷりと暮れた冬の帷に身を置くと、とりわけぬくもりが恋しくなってくる。

アレキサンダーは、名前の勇壮な割には女性好みの甘味をもち、ブランデー・ベースのカクテルとしては古典の部類に入る。ブランデーとカカオの重みのある味わいは、馳走のあとの満ちたりた夜を彩ってくれる。

巻頭特集

テーマエッセイ「正しい」

ALEXANDER

尺度の原器

テーマエッセイ［一］

山本書店店主 山本七平

「正しい」か「正しくないか」――このことは過去においては、きわめて明確な問題であった。一語でいえばその社会の「正典」の通りであれば正しく、人びとはそれに基づく「規範」に従っていればよかった。このことは以上の二語の原意を探れば自ずと明らかになる。カノンとは元来は「計り竿」の意味、「規」とは定規で「範」とはコンパスであり、いずれも「尺度」の意味である。従ってその人間の言動が正しいか正しくないかは、この「尺度」で計ればよかったわけである。

そしていずれの社会でも、メートル原器と同じような「尺度の原器」があり、それは人間には動かせないものであった。ちょうど、メートルが地球を基準としているがゆえに、各人が恣意的にそれを変え得ないのと同じである。いわば儒教の「四書五教」やキリスト教の「旧新約聖書」またイスラム教の「コーラン」などは「規範の尺度の原器」だったわけである。もちろん社会は高等数学でも解けないほど複雑だから「原器」だけでは完全な規範となり得ない。そこでシャリーア法典、ラビ法典、教会法等の法律や、膨大な朱子の集注や著作が生れたわけだが、それらはあくまでも「原器」を基本とした応用的な尺度とされてきた。従ってこの種の著作がどれほど膨大になろうと、それは「原器の否定」ではなく、逆にその絶対化であった。

近代になるとこの「原器の否定」がはじまった。日本ではじめてこれを行ったのは若くして死んだ独創的な思想家富永仲基（一七一五―一七四八）であろう。彼は仏教は「幻術なり」、儒教は「文辞のみ」、神道は「くせのみ」と三教をことごとく否定してしまった。いわば「尺度の原器」をすべて幻術・文辞・くせと否定したわけだが、彼はそれぞれが、その発生した国において、またある時代においては、「規範の尺度の原器」であったことを否定しているのではない。ただ、それがすでに現実の日本の社会において規範ではなくなっていることを指摘しただけである。

ではなぜそうなるのか。彼はそれを「加上」のゆえとした。「加上」と読んで字の如く、「上に加える」であり、過去に発生した思想の上に、歴史的過程を経ることによって、さまざまな思想が加わり、それによって現在の規範ができていると考えたのである。現代的にいえば、思想史的把握といえるであろう。彼はこれを「今の掟」とし、これに従っていることが正しいとした。

いうまでもないが、「今の掟」といっても、それは今の人間が恣意的に創出したのでなく「加上」によって形成された規範であるから、正しいとか正しくないとか言うことは、あくまでも思想史的な「今」の規範で計るべき問題だと彼は考えたわけである。そしてこれが各人が恣意的に動かせない以上、人間にとっては「自然の秩序」と同じような動かし得ざる秩序の基本でありうると彼は考えた。

この考え方はきわめて近代的である。私は間宮陽介氏の『モラルサイエンスとしての経済学』の中に、これときわめてよく似た発想があるのに驚いたが、驚くことが間違っていたのかも知れない。富永仲基のような人が「近代社会における正しいとはどういうことか」を考えたその「加上」のうえに、現在の「正しい」があると考えれば、日本の非宗教的社会倫理の、欧米以上の強固さの理由は、当然のことと考えるべきかも知れない。

紅旗征戎吾が事ニ非ズ

テーマエッセイ——[二]

作家 **近藤富枝**

平安時代の正しさとは何かということから語ってみることにする。それは第一に身分が高いこと、次に美しいこと、三番目が教養のあることで、四も五もなしなのであった。

日本で最初のプロ作家である、天才紫式部でさえも、この三つのワクを全く意識のなかから逐い出すことはできなかった。そのよい証拠に、彼女の作中のヒーローである光源氏は、帝の息子でハンサムで、その上学問音楽絵画漢文に通じ、衣裳にも一家言ある教養人だ。

「こんなに主人公を甘やかして書いた作者も珍しい」

と円地文子氏を歎ぜしめるほどの惚れこみ方を式部はしている。

何しろ身分の高さによってきものの丈まで違い、衣裳の色も違い、文様まで異なったのであった。皮肉屋で通る『枕草子』の筆者清少納言さえも、ライバルの紫式部と同じで、身分の低い男、教養の低い男、美しくない者には容赦のない罵声を浴びせかけ、貴人のすることだったら何でも「めでたし」「おもしろし」とほめ上げている。

このふたりの才女たちでさえ時代の子であることを逃れることはできなかったので、他は推して知るべしである。

正しさというのはまたその人の立場がものを言うことが多いと思う。「紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」と言ったのは藤原の定家さんだが、この言葉にわたしはゾッコン参っている。しかしこれが定家だからいいので、同時代人でも平維盛や平忠度が言ったら、物笑いのタネであり、ずいぶん文化人に弱い近藤富枝も嬉しがったりはしないのだ。

定家は俊成を父に持つ歌人の家柄だから、源平の戦いの最中でも知らん顔するのが見ごとなのである。逆に平忠度は武人であった。都落ちをしながら途中から引返してきて、歌の師の俊成の邸の門をたたく。そして、

「もし勅選集を選ばれる日があったら、たとえ一首なりとも御恩に預りたい」

と一巻の自撰歌集を預けて去るのである。

このエピソードが日本人の琴線にふれるのは、武人でありながら歌に執心であったことによるのだ。

わたしは商家の生まれで、一族にひとりの職業軍人もなく、その上女のことだから戦争は大きらいであった。戦争中も旗を振って出征軍人を見送るのは逃げていた。ある日、文学座の杉村春子氏の家へ遊びに行ったら、風邪で臥床中とのことだったが、逢ってくださった。そのとき春子氏が涙声で、

「大変なことなんですよ。戦争するひとひとりひとりに母がいて妻がいるんです。こうしているうちも、若いひとが弾に打たれていくと思うとたまらないわよ」

と言われた。終りの方はふとんをかぶって、震え声であった。昭和十七年の秋だったと思う。枕もとに坐って聞いていたわたしは、当時文学座の研究生であった。

戦争へのきもちがすうっとこのとき固まったような気がした。「紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」であった。男でないありがたさに、戦場にも駆り出されず、女子大に通っていたおかげで兵器工場でも働かずにすんだ。ただし卒業後は放送戦士(アナウンサー)となって、特攻隊のニュースをマイクの前で読むことになる。

二階級特進は勇ましいけど、二十三や四の若さで将来ある連中が束になって死んでいくのだ。軍艦マーチが鳴り、息を整えて「大本営発表」と読み上げると、もういけません。虚しいきもちが胸に拡がり、凄惨な戦場のようすがパノラマになってうかぶ。そして杉村春子氏の例のせりふがどこからともなく聞えてくる。戦争がすんだらさっさと放送局をやめて、市井に隠れたのはそのせいであった。

「雨の日の書斎を思う」と遺書に書いた学徒出陣の戦死者がいた。この言葉は実に哀しい。もっと知りたかったのに、ゆっくり本が読みたかったのに、平均二十三歳九ヵ月で死んでしまった昭和の男たち。わたしは彼らの代りに勉強しなければならない。

わたしがマイクの前で読みあげた戦死者たちのなかに、知り人はひとりもいなかったが、彼らはみんな友だちで、そのことを思うと戦後四十年経った今も、べんべんと平和に浸っている気にはなれない。美しい絵を見たとき、すばらしい演劇にふれたとき、胸がチクッと痛いのはそのせいである。〈ごめんなさいね。あなたたちは見られないのに〉と思う。

逆に困難な仕事に出あって、取材が難航し、苦しんでいるときは〈あたしも苦労してますよ〉とちょっと胸をそらせたい気がするのだ。

千人いれば千人の正しさだと思う。

さざ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな

平忠度の一首は帰の情で「千載集」を飾った。朝敵の名を憚って読み人知らずとこの歌は書かれた。俊成もまた正しきことをしたものかな……と思う。

恥

テーマエッセイ——[三]

作家 **高橋 治**

ある判断や行動が、正しいのか正しくないのかということが問題になった時、当然、考えなければならないのは、その物差である。

なにに照らし合わせて正しいのか正しくないのか。人はそれぞれの立場や個性の上に立って、その"なに"を選ぶ。

宗教、法律、常識、良識、慣習、家や社会の仕来り等々、ユニークなものでは、土俗の禁忌、方位、易学判断、迷信などというものも、物差の中に登場して来ることがある。

世界万国、その点では大なり小なり似たものだが、曾て、日本人にはあらゆる物差の中で最も重要だとされるものがあった。

それは恥の意識である。

武士の場合には、その意識が許さないことは武士道にもとるとされ、庶民の場合には、"そんなことはお天道様が許さない""ひと様がどう思う""世間様に通らない"などという考え方になってあらわれた。

もっとも、恥を知ることの代表だとされていた武士の場合、どこまで彼らが厳格に自分を律していたかには、かなり疑わしい点もある。それは、武士道を継承したと自認し、庶民にまで士道を規模として生きることを強要した軍人どもが、敗戦に際し、どれだけ"お天道様が許さぬ"と思えることをしたか、私たちの世代はとくと拝見させて貰い、日本に武士道などというものは果たしてあったのかなと疑わしく考えているからである。

だが、近代史の中で、それこそが武士道の現われだと目されることがないでもない。二十世紀初頭の中国の義和団事件がそれで、現地居留民保護を掲げて出兵した連合国の中で、日本軍は軍隊の鑑とほめそやされた。

「背かず、奪わず、姦さず、こんな軍隊が地球上に存在するのか」

と各国を驚倒させたのである。

恐らく、指揮官が余程立派な人で、その上、軍隊の規模も約八千人と小さかったせいでこんなことが出来たのだろうと私は考えている。なぜなら僅々二十年足らずの後に、ロシア革命後のシベリアに干渉戦争として連合国が軍隊を送った、いわゆるシベリア出兵では、どの国のどんな戦史を調べても、日本軍をほめる言葉など一行も書かれていないからである。

それどころか、批判、罵倒の洪水で、日本人としては、顔の赤くなる思いをせずにそれらの戦史を読むことは出来ない。中には、"奪う、姦す、背く、これが本当にあの義和団の時と同じ日本軍なのか"と嘆いている記述さえある。

この戦争で、日本軍が行動した最大規模は三個師団余りである。人数にして約十倍前後と考えれば良い。この数字が実は多くの意味を含んでいる。

日本人の場合、一人一人を見て行くと、恥を知る、良心に従って行動する、つまり『正しい』ことが生き方の基準だと考えている人が多い。そんな点では、恐らく世界でも最高水準にある国民だろう。

だが、その個々人が集団を組むと、別人になったように物差の目盛りをゆるやかなものにしたり、あるいは物差を全くなくしてしまったりする。

たとえば釣りである。海釣りに使われるコマセが、どれほどの害を及ぼし、魚の生態系にまで激甚な悪影響を及ぼすかといわれ出してから随分になる。だが、各地の条例が使用禁止をきめてはいても、コマセを使う人間は一向に減らない。

減らないどころか、日々増大して、当初は専ら磯釣り用だったものが、今では船釣り、堤防釣り、果ては川釣りにまで及んでいる。今日一匹でも多く釣れれば、明日のことなど知るものか、海の汚染など俺になんの関係があるという、集団ヒステリーの中で、釣り人が恥も誇りも失ってしまうからである。

海でいえば、ハマチ養殖が同様で、資源枯渇が近い未来に心配されるというこの時代に、美味くもない魚を作るために魚体の八倍だ九倍だという餌を浪費し、挙句は余って海底に沈澱した餌で自家汚染の赤潮をひき起こす。そして、そのツケは共済制度で他の漁民に押しつけて、平然としている。これも、他人が止めないから自分も止めないという、きわめて都合の良い考え方から出たことなのである。

ゴルフに狂う人たちも良く似ている。数年前に私が計算した数字だが、日本のゴルフ場の総面積は国土の〇・三パーセントになる。僅かなものだと思うかも知れないが、それがそうではない。日本の有耕可住面積は国土の三割にすぎないのだから、実体は一パーセントなのである。国土が狭すぎるからと他国にまで侵略の手をのばした国が、少々金持になったからといって、一パーセントの国土を、なんの生産にも使わぬ遊び場に用いているのが、果たして『正しい』のだろうか。

コマセは条例違反だが、ハマチ養殖とゴルフ狂いは全く合法的である。法の範囲内だから『正しい』と考えている人たちは、自分のしていることにどんな物差を当てているのだろう。しかし、これも数を頼んでのことで、一人一人になった場合、どなたも立派なことを述べられるにきまっているし、『正しい』漁民で『正しい』スポーツ愛好家であるに違いない。

だが、そんな『正しさ』を昔の日本人は恥じたものである。

全ては好みの問題

テーマエッセイ——[四]

脚本家 **石堂淑朗**

脚本家になりたての頃、実作と並行してしばしば映画批評めいた文章を書きなぐった。

それがある時期から俄かに嫌気がしてやめてしまったのは、何のことはない、己れの好みに批評的=客観的言辞をまぶしているに過ぎないことに思い至ったからである。

こうこうだから嫌いだ、好きだ、と書いているつもりが、何のことはない、嫌いだからこうだ、好きだからああだ、という逆の順序で筆をとっていることに思り到り、評とは言を平にすることであろうに何たる不様と映画批評をやめた。

それと共に、殆んどの客観的、批評的、乃至は科学的な言論も、実はその奥底に書き手の好みがかくされているのではないかと疑うようになった。

さしずめマルキシズムなどはその手の最大のものらしいと考えるようになった。

資本主義の崩壊から社会主義、共産主義への移行というマルクスの考えは、ソ連はじめ中近東や中国など資本主義以前の国々のカクメイに利用されたわけだが、この現実はマルクスの科学的言辞——つまり資本論——を見事に裏切るものだった。

ナセルや毛沢東は、自国の政治経済にマルクスの考えを適用したのではなく、先進国=資本主義国への反感、怨念を具体化するために、反資本主義を標榜するマルクスを持ってきたに過ぎない。

そして、当のマルクスは、迫害されるユダヤ人の一人としてアーリアン民族打倒の念を意識下に秘め、一見科学的に見えるユートピア主義を主張したのだから、エジプトや中国の社会主義、共産主義礼賛は科学でも何でもなく、マルクスの怨念、つまりは好みが、ナセルや毛沢東のそれを触発したに過ぎないのであろう、などと私は考えるようになった。

ナセルが王やその背後の英国を追放し、毛沢東が国民党を台湾に追いこんだのは、彼を支持する貧民たちが大勢いたからである。

王朝が交代するのは歴史のならいだから、私はその事自体に異を唱えはしないのである。ただ、かれらが、単なる王朝の交代をもっともらしく、科学的なマルクス=レーニン主義の勝利だの、歴史の必然などと正義の看板を掲げるのを困ったものだと思うだけなのである。

十年も前、エジプトに旅した時、ナイル沿岸のアシュートで、これがナセルの弟の家ですと大邸宅を示されて、成程！と膝を打った。

中近東の国々では、血縁のサークルは強烈で、ナセルの成功は、エジプトのナショナリズムの勝利、というよりは、ナセル一族の立身出世という面も大きいのである。それが正義の勝利の看板にかくされている。

フィリピンのさわぎも眉につばせねばならない。日本ではアキノ大統領の出現を、民主主義の、つまり、正義の勝利とさわぎ立てる向きが多いが、何、これも単なる王朝の交代にすぎないかもしれないのである。

アキノ一族はフィリピンの大財閥で、マルコスという新興財閥の横暴に我慢ならなかったのである。要するに新旧財閥の暗闘がフィリピンのさわぎであり、どちらが正しい、という筋合いのものではないのである。

韓国の金大中氏と現大統領の争いも恐らくそうで、大方のインテリ日本人が金大中を正しい、と見るのは間違いである。金氏は何としても大統領にならないと一族を食わせられないのである。

話が大げさになったが、私が言いたいのは片々たる批評文にせよ、一国の政治にせよ、〝正しいということ〟は、この世には先ずありえないのだということである。

〝正しい〟ということは、大方の場合、ボロかくしに使われるに過ぎないのである。

正しいことには気をつけねばならない。

〝私は正しい〟という人にはなるべく近付かぬが悧巧である。

私は正しいと言いつのる人は、その正しさを実証するためには何をするか知れないのである。怖いのである。

私は政治家に近づきたくない。

宗教家にも近づきたくない。

新聞の社説は絶対に読まない。大新聞など、戦争中に戦争を賛美し、平和時に反核をとなえる時局便乗者の作っているものだから正義を主張する社説などをのせる資格はないのである。

正しいということは即、正しくないことである、という逆説のみが正しい。

「正しくない」の蔓延

テーマエッセイ——[五]

東京芸術大学工芸科教授 **浅野 陽**

ろくろをまわす。小鉢をつくる。秋の日は短い。時間が濃くなってくる。半日もろくろに夢中になると、小鉢が何十個も並ぶ。

やれやれと思ってながめまわして、我ながら驚くことがある。無論、純粋な手工芸なのに、並んだ鉢の大きさは二ミリと違わない。

他日、又ろくろをまわす。来客や電話が多い。気合いが入らない。終いには、うーん、あそこの蕎麦が食べたい、などと思い始める。今日はどうもだめだ、と腰を上げてみて愕然とする。大きい鉢や小さい鉢が口をあけて笑っているではないか。

一日は二十四時間である。しかしあるときは限りなく広がり、またあるときは一瞬にして過ぎ去る。

道を渡る。それはひとつの機縁である。信号は赤かな、青かな、と想う。目に飛び込んできたものが青の信号なら、よし渡ろう、と思う。そして歩道を行く。ひとつの時間が終わる。長ければ三分、短いところなら一分とかかるまい。

空を見上げた。秋を知る。友を誘って、昔行った山に行きたいと想う。歩くほどに思いはつのり、夜、さっそく電話をして、晴れた日曜日、友と秋の山に行く。三日かかることも、時には一週間待たねばならぬこともあって、事は終わる。

時間とは、機縁によって起こり、行うことによって終わる。念々起滅、様々な時間が、各々独立して在り、そのなかで事は起こり、消えていく。

それがからみあって紡ぎ出された日々、それが我我の時間だ。生きる、ということは、常に一期一会ということだ。二十四時間を何年過ごす、と考えはしない。

明治以前、盗みを働いた者には「死」が、戦に破れた将には「死」が、果たせぬ恋を貫くふたりは「死」を、と「死」で償い、「死」で全うし、「死」で証を立てる場が少なからずあった。日本人は、言葉より行動、態度を重んじる民族であった。日本には言葉より重く、言葉より深い矜持があった。

「正しい」という観念は、集団で生きて行く生物たちの持つ神秘のなかに自ずと在ったものではなかろうか。ミツバチは、餌を探すハチとそれを運ぶハチにわかれる。調べてみても、それらのハチには何の相違もないという。人知の及ばぬ摩可不思議、集団の深層の摂理心、とでも呼べばよいのだろうか。

人間の祖先も、群れをなして生活していた。おなじように深層の摂理をもった彼らはしかし、ミツバチよりも遥かに高度な知恵を身につけ、群れの秩序を高め、より強い結束を求めて膨張してきた。混乱のなかをどう生き抜くか。時には本能や感情を越えても、群れに殉じなければならぬ。そこで日常生活の些細な事柄に、「正しい」という考えを立て、些事を律した。それを守れば、群れの一員としての安全があり、暮らしていくことができる。群れを乱す行為はそのまま自らの生の不安につながっていた。つまり死を意味していたのである。

明治以後の日本は、開国し、西欧の諸制度をまねて国をつくった。背景にキリスト教の、正か邪か、二者択一の考え方が芽生える。

社会が膨張し、法が整い、「正しい」「正しくない」という捉え方が浸透して以後、集団の深層の摂理が消えて、「正しさ」という物差しがもうけられ、人は自らの処し方をそれに照らして生きて行くことになってしまった。法の上では、「正しくない」ということが厳然としてある。いまや人は「正しくない」ということを示すために法をふりかざす。「正しさ」とは、法の中に在るものだったのだろうか。

太古、一日は二十四時間という数字ではなく、太陽の動きによって自らの体が反応する習性であった。生きるということも、念々起滅する出来事のあつまりにすぎなかった。それが、自然の在り方だった。

時代が進み、社会が整えられ、人が豊かになり、さらに多くを望むようになって、本来自ずと持っていたはずの、なんと多くのものを失ったことだろう。「正しくない」という言葉がはびこって、素朴な「正しさ」が消えていく。そしてもはや誰も、そんなことをあやしんだりはしないのだ。

ビルマにて

テーマエッセイ——［六］

『週刊朝日』記者 **森 啓次郎**

ビルマに行ってきた。ビルマは社会主義国であって日本からは直接行くことができない。ふつう、隣国のタイから空路入国することになる。

「ジョニ黒とスリースターを買って行きましょう」

バンコクの空港で連れの友人がすすめた。

「?」

「とにかく人気があるらしいんですよ。町で売ると結構いい値になるそうです」

「……」

ジョニ黒とはいわずと知れたスコッチのジョニーウォーカーの黒ラベルであり、スリースターというのはイギリスの紙巻きタバコである。アジア旅行十数回のベテランの言葉には、理由など明確ではなくても説得力がある。免税店で二つを求めると約三千二百円で手に入った。例の透き通ったビニールの手さげ袋に二つは入れられた。

ビルマの首都ラングーン市に着いたのは、夜の七時ごろだった。入国検査はさすがに厳しく、軍服のような制服を着たいかめしい顔構えの男たちがズラリ待ち受け、持ち込むカメラ、時計は何社製か、外貨はドルをいくら、円をいくら持っているか、などを次々と質問してきた。そして特別の用紙にはっきりと書き込まされ、ドンとスタンプを押された。

「これはパスポートと同じくらい重要だ」

とついでに念を押された。さらに、徹底的に荷物の中を調べられたりして、税関を通るのに小一時間はかかった。

ところが、社会主義国への第一歩を踏み出した途端、事態は一変した。四、五人の男たちがバラバラと寄ってきて、実に愛想よくビニールの手さげ袋の中身を売ってくれと迫ってきたからだ。

「二百五十でどうか」「四百では……」

社会主義国=平等=潔白といった図式が頭のどこかにあって、ほんの少し前までその厳格さの中に居たものだから、どう考えていいものやら頭がクラクラした。黙っていると値はどんどん上がっていってしまう。

「では、四百五十まで出す。町で売ったら、そんなに高くは売れない。今売った方が得だ」

扉一枚向こうの厳格な人々は、当然、扉一枚こちらの出来事は知っているに違いない。男たちはといえば、別にこそこそとやるわけではなく、実に堂々としている。

「バッグにしまい込んだほうがいいですよ」

なんて言われて、あわててバックパッカーに透明な袋ごと隠した。案の定、空港を出ると別の一団が待っていた。

「五百でどうか」

隠しても隠さなくても事態は少しも変わらなかった。タクシーに乗ると、「五百五十が相場だ。オレが買おう」。タクシーを降りると、ぐるり周りを取り囲まれて「五百」「五百五十」とくる。結局、翌朝、町を歩いてみたところ「七百（約一万五千円）」で売れた。

下級公務員の一ヵ月の給料が二百五十チャット（ビルマの通貨単位）、約六千円くらいだから、これは大変な値段である。うまく行けば一銭も使わずに何日間かを過ごせるかもしれない——、ウフ。

と、思ったのは甘かった。まず、ホテルはすべて国営で、宿泊料金を「きちんと」払わなければならない。「きちんと」と書いたのは、入国の際に渡された「パスポートと同じくらい重要な」紙に、使ったお金をすべて書き込まれてしまうからだ。つまり、ヤミでいくらお金を手に入れようと、公式的には一銭もお金を持っていないことになる。

一銭も両替せずに何日間かを過ごしたとすれば、出国の際にそれこそ厳格に調べられるに決まっている。

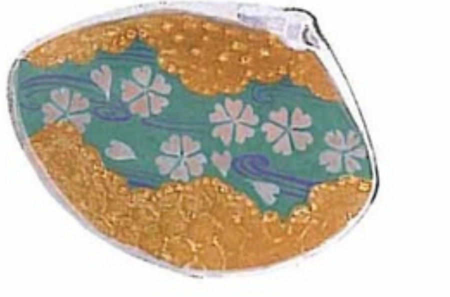
しかも公的な店での買い物はすべて例の紙に書かれてしまう。三ヵ月分の給料を手に茫然となった。お金があっても公的な場所では一切使えないのである。

結局、丸一日外車を借り切って郊外にある寺院巡りをしたり、友だちになった人々を招いて豪華な食事をしたりして、見事に使い切った。

ところでもし、ビルマの出来事を異常だと感じた人がいるとしたら間違いだ。たとえばウイスキー一本、タバコ一カートンの値段が給料三ヵ月分だとしてもそれは考え方による。酒、タバコなんて生活に必要ないし、体にも悪い。むしろ、こんなものが高ければ高いほど健全な社会が生まれる。これは極めて正しいことである。

出国の際、「何チャット残ったか」と質問され、堂堂とワイロを要求されたが、これだって何もビルマに限ったことではない。かつてコロンビアの警官には、「うちの女房は世界のお金のコレクターなんだけど」とスマートにソデの下を要求されたし、ペルーの警官は、ご丁寧にも「コインではなく、紙幣のね」とつけ加えた。文明国だってチップを強制されるし、日本だってサービスもされていないのにちゃっかりサービス料をとられたりする。断れないだけにもっとタチが悪い。

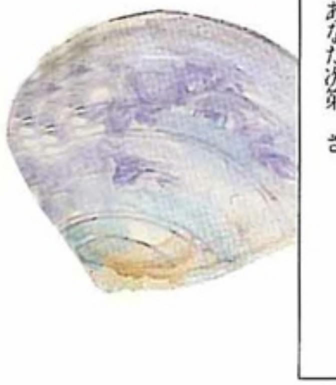
あることを「異常」と受け取る人は、その反対側に「正常」があると信じている人だ。しかし、よく考えてみれば、異常の反対はやっぱり異常だし、正常の反対は間違いなく正常なのである。あることが正しいか正しくないか、それはアップ・ツウ・ユー、あなた次第、さ。



正しいお巡りさん

テーマエッセイ——［七］

画家・作家 **赤瀬川原平**



正しさをめぐってまず頭に浮かぶのは、お巡りさんとの関係である。

私はお巡りさんによく不審尋問を受ける。お巡りさんは正しさを守る存在であるから、私が不審尋問を受けやすいのは、私が正しさから外れやすいのかもしれない。

以前はほとんど毎晩不審尋問を受けていた。そのころ深夜の帰宅が多かったせいか、駅から自転車で帰るとき必ず呼び止められて、その自転車はお前のものか、どこで買ったのか、と尋問される。

この場合、深夜に帰るということがすでに正しさを少し外れているらしいのである。しかもその深夜に自転車で帰るというのが、もう一つ正しさを逸脱しかけている、ということになるのだろう。

はじめは腹も立ったが、そういう正しさとの距離関係がわかったので、私は呼び止められたら素直に心ゆくまで尋問に従うことにした。こういう場合、尋問に逆らうことがまた正しさから外れるようなのである。

しかしその回数があまりに多いのでもう一度わが身を振り返り、私の自転車が相当な中古品でボロボロであることに要因があると気付いた。自転車という物はできるだけ新品が正しいのであって、それがボロボロであると正しさから外れて、どこかで掠めてきたものではないかという疑いが生じるらしい。

そのことに気がついてから、私はほとんど盗まれる恐れがないようなその自転車にきちんと住所氏名を書いて、その脇に、

「オンボロ自転車愛好会」

と書き足した。つまり自分はこのボロさかげんを承知の上で所有しており、紛れもなく自分のものだという表現である。次の機会にはこれを一目見せてムダな尋問を避けようというアイデアである。

ところが次なる深夜、この表記がまるで無効であることを知って唖然とした。お巡りさんはそんな表記には目もくれずに、その横に書いた住所氏名を素早く手で覆い隠し、

「あなた、住所氏名は?」

と尋問してその表記と照合しようとする。正しさとユーモアとはすれ違うものらしい。私はやや気落ちして答えながら、この自転車を二年前に古物屋で買ったことを説明すると、

「領収証はもってる?」

と尋問されたので、これには愕然としてしまった。

つまり老朽化した自転車に乗るときは、できるだけ深夜を避けて白昼を選び、購入時の領収証を常に携帯するのが正しいやり方となる。これはもうほとんどパスポート携帯の外国旅行だ。

ところがこれが、白昼にも不審尋問を受けるに及んでほとんど呆れたのである。駅で用足しして帰るとき、交番の前で呼び止められた。私は自分の体から何か正しさを打消す電波が放電されていて、それがお巡りさんの感受性に触れるのかと思うほかはなかった。

これはしかし必ずしも間違ってはいなくて、私はふだん犬に吠えられやすい性質である。私は子供のころから犬が怖いので、犬の前を歩くときはビクビク気味に緊張する。そうするとその緊張波が犬に受信されて、犬はかえって吠えるらしいのである。

この犬との関係が、お巡りさんとの間でもまったく同じに作用することを発見したのだ。つまり私は不審尋問が多いのでついお巡りさんを意識してしまい、そうするとますます私の身体から緊張波が放電されて、ますます不審尋問を受けることになる。

つまり市民というのは交番の前でもお巡りさんのことなど意識せずに、仕事や家庭のことなどを意識しながら通過するのが正しい歩き方なのである。それがわかってからの私は、交番があるといち早く目をそらして、仕事や家庭の考えに熱中しながらその前を通過する術を身につけた。

その後も私の正しさへの研究は進んで、オンボロ自転車であっても、前に子供を乗っけていれば不審尋問を受けないことがわかった。同じように、自転車の前の籠に買物袋が載せてあって、ネギや大根の頭がのぞいている場合も不審尋問は受けずにすむ。つまり正しい市民は、いつも自転車に子供やネギなどを載せて走っているようなのである。

しかし自転車に乗るたびにそれらの物件を用意するというわけにもいかないので、もう少しコンパクトにできぬものかと研究した結果、自転車の前の籠には事務用の茶封筒一枚でも充分に不審尋問は受けないことが解明された。

事務用茶封筒というのは社会人の仕事のシンボルである。それはネギや子供とともに、正しい市民であることを示すアカシだ。つまり人は家庭というものを根拠地として、仕事のためにA点からB点までムダなく進むのが正しい街の歩き方だ。

というところまでがこれまでに解明された部分であって、その後も私の正しさに関する研究はつづけられている。

初心忘るべからず

テーマエッセイ――［八］

宝生流能楽師 **宝生英照**

何かを「正しい」と思う時――そこには、その人の価値観とも、思い入れとも言うべき物が、少なからずあるものです。又、今日、社会が多様化しており、人の価値観も千差万別です。こうした状況の中では、人に意見等求められた時、まず自分の考えとして、「私としては……」といった答えかたにならざるを得ないのです。

今、私が業としている能楽師という職業は昔から大切に受けつがれているものなのでありますが、或る程度の絶対が存在し、又これが必要な職業です。例えば、何百頁にも及ぶ台本（謡本といいます）があり、演じる者はその一言一句の間違いも許されないのです。謡本は伝承者にとっては聖書であり、六百余年という長い年月の中で洗練され、さまざまな名人の手によって磨きあげられてきた、いわば結晶なのです。

又、能楽師にとっては、師匠も又正であり、絶対です。私は物心つくかつかないうちに、祖父の先代宗家と、父の十八代宗家に能を教えられました。こうした芸事の家に生まれた方は皆さん、多かれ少なかれ、そうした所があることと思いますが、父は私にとって、父である上に師でありました。又、父も私以上に、先代の宗家である祖父を、そのように見ていたに違いありません。幼いうちから、肌身をもってたたきこまれたノウハウは、私の知らないうちに体にしみこんでいるのです。すぐれた能楽師は、自分流の解釈など一滴たりとも加えずに、教えられたとおりに演じるだけでも観客を感動させ、酔わすことができるといいます。それは、没個性ということでは決してありません。なぜなら、人それぞれに持って生まれた声、天分など、消しようのない要素があるからです。その上に、何でも正確にできる自信が加われば……。あとから個性はいやでも出てくるものなのです。しかし、それには、気の遠くなる程、稽古を続ける必要性があるのです。

初心忘るべからずという言葉があります。殆んどの方が一度は耳にしたことのある言葉でしょう。結婚式のスピーチや、新入社員への訓示にも使われます。この一語は、世阿弥の書いた『花伝書』の一節であります。初心という言葉は、現在では初心者等、まだ物事に慣れないうちの初めの志を指しておりますが、実は、仕事を一人前にこなせるようになった時点ではじめて初心とみなされ、能楽師としての第一歩とされるのです。

能楽はロングランということは行なわれず、一つの曲目は、一回演じられたら、間をおいて、多くても年数回の上演にとどまります。とすれば、能楽師にとって舞台は、そう年中できるものではありません。本番に到って悔いの残らぬよう、最善を尽くせるように、一回一回の稽古を一生けん命にする事が大切だと言えます。

今、日本の美の再発見ということが提唱され、各地で薪能が競って開かれています。無論、天候に左右されることを思えば、能楽は能楽堂で観るのがベストには違いないのですが、自然を舞台にかがり火に照らされた面や装束の美しさには胸おどるものがあります。たとえ、謡の文句がよくわからなくとも、幽幻の雰囲気にひたるだけでも、深い満足を得られることと思います。ただ、演じる側にも観る側にも、又、主催する側にも考えなければならないのは、これらの薪能は、決して昔と同じ条件でなされているのではないということです。なぜなら、昔は、ライトやワイヤレスマイクなどなかったのですから。観客は声の通るだけの、ごく少数だったと思われます。とすれば、よく修行した演者が、ゆき届いた舞台効果の中で、心ある観客を対象に舞ってこそ、本当の意味で満足の得られる舞台になるのではないでしょうか。

「正しい」ということに派生して、いろいろと主観を申しのべてまいりましたが、皆さんも、機会がありましたら、是非一度能を観にいらして下さい。世界に誇ることのできる文化であると、私は確信しております。

世にも貴重な手紙

テーマエッセイ――［九］

『新潮45』編集長 **亀井龍夫**

「正しい」がいかに難題であるか、いざ書く段になって思い知らされた。思うに、私が日ごろから「正しい」に無縁な人間だからであろう。「正しい」を信条としている人にとっては、さほど難題ではなく、すらすら身辺雑記を綴れば、たちまち結構な原稿ができあがるに違いない。が、私ときたら、「正しい」人を友人に持つことすら、極力避けようとする人間なのだから始末が悪い。「正しい」人と話し合っていると、息苦しくなるのではないかとさえ思うのだ。「正しい」というテーマを与えられて、あらためて、そんな情け無い自分を発見し、

…た次第である。

テレビでも「正しい」人の登場するドラマはなるべく見ないことにしている。たとえば例の「おしん」だが、見ていて私はただウンザリするばかりだった。あれほど自分だけが「正しい」と思い込んでいる女はいない。ドラマだからいいようなものの、あんな女に実際に行き合ったら、「おしん」に涙を流したという財界の偉いおじんたちも、さぞかし辟易すると思うのだがどうだろう。

そんなことを考えながら、いったいこの世に「正しい」人がいるとしたらどんな人だろうかと想像してみるが、これがまたいっこうにイメージがわかないのである。「正しい」人や「美しい」人は童話の中にしか存在しないと、ある児童文学者がいっていたような気がするが、そのとおりかなと思ったりする。日本には神がないせいで、キリスト教社会ではそうではないのかとも思うが、作家の曽野綾子さんは、ことあるごとに「正しい」人なんかはどこにもいはしないし、だから人間は救われるのだと強調しておられる。

ただ、ふと私の頭に浮かんだのは、教職についている人たちはどうかということだった。ひょっとすると、この人たちは、ふつうの人より「正しい」人に近いのではないか。なぜなら、いつも子供たちに「正しい」行い、「正しい」考え、「正しい」算術、「正しい」文章、「正しい」漢字を教えている。……と、ここまで考えたとき、私は思い出したのである。私が週刊誌の記者をしていたころの体験談で、まだどこにも書いたことのない、とっておきの話があったのを。

もうかなり前の話だが、日教組の大会が札幌で開かれたときのことだ。その年は右翼の日教組攻撃がとくに激しく、札幌市全体がなにやら不穏な空気に包まれていた。私は東京にいて、若い記者が二、三人現地に取材におもむいた。さいわい警察の厳重な警備のおかげで、大会はとどこおりなく進行したのだが、記者たちからの報告の中で私の関心をひいたのは、あろうことか日教組の先生方が警察の庇護のもとに、夜の札幌で大いにハネをのばしていたということだった。当時の時の人でもあった日教組の偉い委員長までが、夜は外出禁止だったにもかかわらず、深夜、いっぱい機嫌でホテルの裏口からご帰還あそばした。むろん私はその話も一挿話として記事にした。

それが偉い委員長どのの逆鱗に触れたのである。さっそく彼は編集長宛に抗議文を送ってきた。抗議文は万年筆による委員長どの直筆の手紙だったが、文中に私たちが首をかしげざるをえない箇所があった。それは、いっぱい機嫌うんぬんを批難しているくだりだが、そのままを引用すれば、「真相をぼう大に書いたものでもなく、デッチ上げてす」とあったのである。しかも、編集長の姓は「野平」であるのに、封筒の宛名も文中でもそれは「野村」となっていた。すぐに編集長は返事を出し、「真相をぼう大に書いたものでもなく」の意味がわからないことを述べるとともに、「愚生の姓は〝野村〟に非ず、以後ご承知おき下さらば幸甚です」と書いた。

ほどなく委員長どのから二信が届いた。まず姓を書き違えたことの非礼が詫びてあり、それから、くだんの文章はこう書き改めてあった。つまり、週刊誌の記事であるから、いずれ読者は「針小庇大とは思うが、まんざら火の無い所に煙はたたんだろう」と思うに違いない。しかし、これはまったくのデタラメだから「貴紙を徹底的に究明」する――。

またしても私たちは小首をかしげざるをえなかった。「針小庇大」は「針小棒大」の間違いであることは確かだが、もしかすると、「真相をぼう大」もそうだったのかどうか。また、こういう場合は「究明」ではなく「糾明」が「正しい」漢字の使い方である。

さらに、当方が記事の訂正をする意志のない旨を伝えたことに対する委員長どのからの三度目の手紙。やはり万年筆による直筆だが、「全く遺憾な記事」であるから、いま一度事実関係を調査して「可急的速かに」返事をするように、との内容だった。「遺感」は「遺憾」、「可急的」は「可及的」の間違い。

委員長どのは編集部相手ではラチがあかないと思ったのか、最後に社長宛に手紙をよこしたが、今度は姓ではなく名を書き違えていた。「亮一」が「享一」となっていた。「正しい」漢字を教えるのを職業としている先生たちの〝親玉〟からいただいた世にも貴重な手紙を、いまも私は大切に保管している。

少年期

テーマエッセイ――［十］

俳人 **上田五千石**

だいたい私たちの世代というのは「正しい」ということを、あんまり信じていないのではないだろうか。

私たち世代というのは、まず五十代といっていい。実年という呼び名があてはまる年頃であるが、そういう年代は「正しい」ということを信じていない、というより、「正しい」ということがどういうことか、わかろうとしないし、これが「正しい」、誰が「正しい」なんてことが、あってたまるものかと思っているような気がする。

少年期に「八月十五日」を体験した傷痕というものが、いまもって尾を引いているのだ。

つい最近必要あって、戦災をまぬがれた古い写真を整理していたら、昭和十五年の小学校入学時の、それこそ学帽から、金釦の洋服、ランドセル、手にした紙挟(書方の)、スリッパ入れ、皮靴までオールおニューのピカピカ一年生の私が出てきた。家の門の前でにこにこして立っている。その当時、家のかかりつけの写真屋（写真家ではない）さんというのがいて撮ってくれた一枚である。

この一年坊主の頭の中はどうだったかというと、幼稚園の時に白髭のおじいちゃん先生がたたきこんだ、末は博士か大臣かという希望が、少し歪んで、家に出入する軍服の偉い人に憧れてか、幼年学校志望になっていたような憶えがある。つまり末は中将、大将というわけである。カッコいいから、そうなりたいぐらいのもので、事変といっていた日中戦争の切迫感が、そうさせたということはない。ところが、二年生の二学期にハワイ真珠湾攻撃から対米英戦争がはじまった。そうなると、あたりの様相がガラリと変り出した。

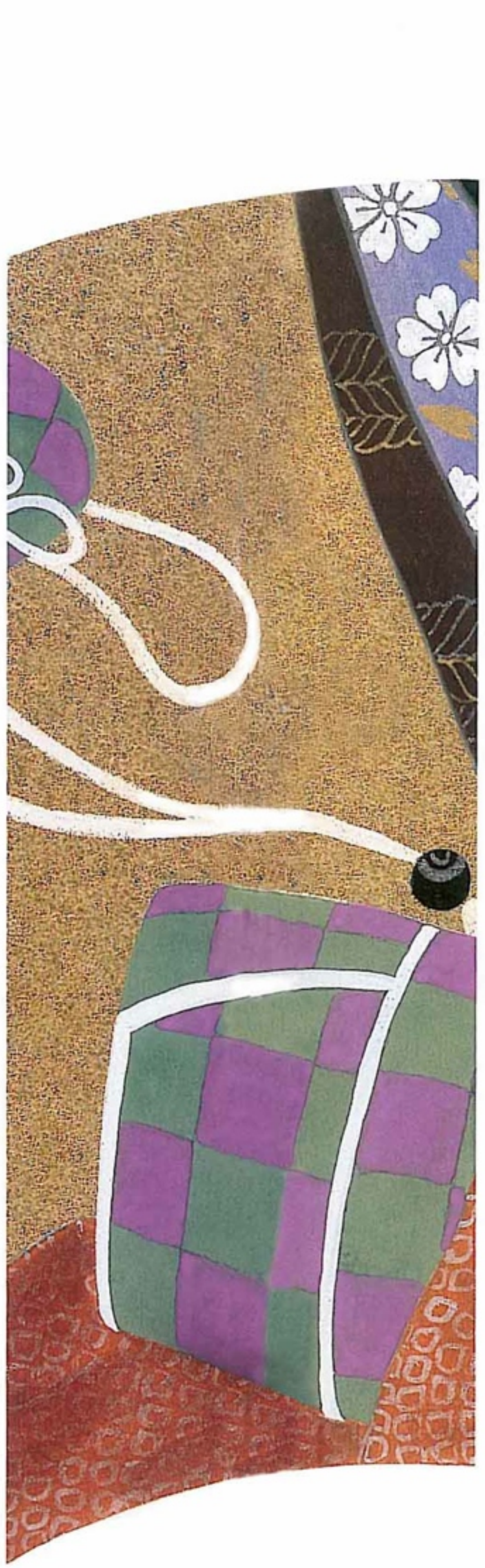
そうだ、小学校はもう国民学校という名になっていたし、校長先生も軍服のような国民服に戦闘帽という格好で朝礼の壇に立つようになっていたのだった。徐々に国全体の方向が転じていき、ここでガラリと変ったのだった。昭和十七年四月に東京の空に米軍機が出現した。空襲というより、まさに飛んで来たというような感じの、その機影を見送ったおぼえがある。小学生は少国民となり、読物はのらくろや冒険ダン吉から、いっぺんに「若櫻」「海軍」という軍人志望ストレートの雑誌になり、「少年倶楽部」は消えてしまった。それも当初はエリート軍人への憧れを満たしてくれていたが、いつの間にか、少年航空兵や予科練へ、つまり美しい死への最短距離の道を指し示すものになり、やがてそういう雑誌さえ薄くうすくなって、昭和十九年には出ていなかったように思う。もはや大将も中将にもなり得るなどという時間が人生にはないことがはっきりした。どうやって早くお国のため、天皇陛下のために死ねるかが、五年生の考えであった。軍国の少年の白虎隊化に教育の効果と宣伝の滲透は万全であったのだ。そのくせ少年たちは快活で、それこそ「ぼくたちの好きな戦争」の渦中でいきいきとしていた。一寸つらかったのは食い物の不足だったが、野草のあれこれが喰べられることを知ったり、好き嫌いがなくなったのは私にはよかった。十九年七月に、信州の寒村へ疎開した。ここで山猿たちにもまれて、東京っぺの私は鍛えられた。ここの少年たちは満州の少年義勇軍となって大陸にいくイメージを植えられていた。寒冷地ならではの教化策の成功であろう。

昭和二十年八月十五日、前夜から村の主流駒沢川の源流に野営した部落の少年たちは、谷奥の小さな堰の水門のハンドルを操作して、山女魚を落しては手掴みをして焼いて喰った。旨かった。天窓のような谷空の青さにB29が光って通った。村に戻ると、川が増水して大騒ぎしていた。犯人たちは大目玉を喰うところだったが、玉音放送のお蔭で有耶無耶になったのは有難かった。

その日から、また少年の人生観、世界観はまたガラリと変ることになる。教育の転換ではいろいろの悲喜劇が生まれたが、先生がザンゲした記憶はないし、先生への敬愛が失われたというおぼえがないのは不思議だ。よほど昔の教育者はデキていたというほかない。それはさておき、生きている。このことがこんなに自分にそっくり戻ってくるとは思わなかった。と同時に昨日までの美しい死の幻想から見放された後味の悪さは、妙な羞恥を呼んだ。

私の、私たちの少年の魂を誰かがもてあそんだことは確かなのだが、それは誰でもないかも知れない。歴史とか、神とかを指弾しても仕方がない。ただ、「正しい」ということはどこにもなく、誰にもないということを、しっかと迷信することで、その償いをつけようとして生きてきたことはいえる。

（「正」という漢字の最原始形が「ふくらはぎ」と足首の合字に成ると知って、「正しい」ということは、足で立つこととわかった。それなら「正しい」というのが、「立場」「立場」で異なっても当然至極ということになる。）



ILLUSTRATION・大谷まや

親が子に引き継ぐ正しさの基準

テーマエッセイ――［十二］

クリスティーズ日本代表 **日比谷幸子**

人の縁とは不思議なものです。

こうして私がクリスティーズの仕事をしていますのも、さまざまな方とのご縁があったからと言えましょう。短大を卒業したのち、ある方のご紹介で英国大使館に勤務していた私は、二十四歳の秋、単身ロンドンに渡ることになりました。当時上司だった方が、退官後、英国クリスティーズの顧問になられ、その方から熱心に渡欧をすすめられていたのです。それ以前から美術に対する興味はありましたが、考えてもみなかった新しい世界が、これを機に始まりました。

当時、既に一人前のつもりでいた私ですが、英国社会の成熟度、奥深さ、そして人の心の豊かさ、温かさに触れ、自分でも驚くほどに、初心を取り戻していました。何でも吸収したいという知的好奇心と、果たして自分の持つ常識がこの世界で通用するのだろうかという不安のせめぎあい。自分は今「異国」にいるのだから、と多少緊張もしていました。けれど、道徳的にみて正しいことは、日本でも英国でも同じように正しい。この、当たり前のことに気付くと、ここは「すべてが異なる国」なのだという不安は消え、私のロンドン生活はきわめてスムーズに始まったのでした。

ある日、〔日本でトイレットペーパーの買い占め〕という珍現象のニュースが、海を渡って私達の耳に届いてきました。そしてまもなく、ロンドンは、何故か極度の砂糖不足に陥ったのです。マーケットには、「一人一パックのみ」という張り紙がだされ、逆に不安でしたが、私の知る限り、このルールはきちんと守られていました。この状態はしばらく続き、クリスマスが近づくと、新聞にこんな見出しが見られるようになりました。いわく「覚えていますか　砂糖の代わりにハチミツでクリスマス・プディングを作ったことを」「戦争中の知恵を活かそう」。そして、ミセスA(72歳)やミセスR(65歳)の四十年前のレシピがちゃんと紹介されているのでした。

一人が買い占めれば、誰かが迷惑する――皆がそれを認識していました。皆が知恵をだしあい、物足りなさを共有しあって、社会のルールを守りました。戦争中だって、配給制のなかで何とかやりくりしてきたわ。ルールは守られるべきだ。困っているのは我が家だけではないのよ。皆が各々の考えて、正しいと思うことを実践したのです。

そしてほどなく、砂糖不足は解消され、静かに張り紙ははずされました。

英国では、子供のしつけに大変厳しく、まだ言葉もしゃべらぬうちから体にうえつけるようにしてしつけていきます。嘘をついてはいけません、時間は守るべきです、人を差別してはいけません、人が大勢いるときは必ず列をつくって並びなさい、食事の時はひじをつかないように――。そして親の権威はとても強く、子供たちは、パーティの場やマーケットなどでは大人がだめだということは決してしません。何がして良い事で、何がしてはいけない事か、親は自分たちの祖父が、祖母が、父が、母が、そうしてきたと同じように繰り返し繰り返し子供に教え込んでいくのです。そうして育った大人たちから構成された社会は、とても整っていました。

こうしたことは、集団生活の中ではごく自然なことといえましょう。そして幸い、私が親から受け継いだ基本的な価値基準は、四年間の英国生活の間、一度たりとも私を裏切ることなくずっと私を支え、守ってくれたのでした。

正しい事というのは、時として実践するには難しいことがあります。仕事に於いても、時に持ち合わせのない勇気を必要とすることもあれば、自分が正しいと思う事が真に正しい事なのか、他人の尺度ではそうではないのではないか、と迷うこともあります。そんな時、私に判断をさせるものは、やはり親が私にうえつけてくれた基準なのです。

所詮子供というものは半人前なのであり、まわりの影響を受けて一人前に育つものなのです。親には、社会の一員としての子供に、早い時期から正しい選択をするための価値観、あるいは道徳心をうえつける義務があるといえましょう。成長の過程で多くの人や経験にめぐりあい、親ゆずりの価値観にてらして取捨選択が行われ、そして新たに自分自身の価値観を育てていく。たとえ一時、人生の軌道からはずれてしまうようなことがあったとしても、基本となる物の捉え方さえしっかり根付いていれば、一人前の社会人になった時、正しい判断力はもどってくるものだと思います。

縁あってめぐりあえた遠い国の人々のなかに、私はそうした姿――確かな基準を持ち、それによって常に自分を律し、それを守る自分に誇りをもつ生き方――を見てきました。そして、それもまた、英国の財産のひとつなのではないかと思ったのです。

ステア対談 徳間康快 VS 名取裕子

YASUYOSHI TOKUMA VS YUKO NATORI

「首都消失」の名取さんの迫真の演技は、大変好評ですよ。

これからは自分を磨いていかなければならない時代だと思ってます。

「首都消失」に出演して

徳間――今日は、来年の一月十七日東宝洋画系で公開になる大映の話題作「首都消失」に主演された名取裕子さんをお招きして、いろいろお話をうかがいたいと思います。

最初に、「首都消失」に出演いただきまして、本当にありがとうございました。

名取――いえ、とんでもない。

徳間――この「首都消失」は、非常にいいものに仕上がったようですね。

名取――そうですね。

徳間――音楽も「アラビアのロレンス」「ドクトル・ジバゴ」「インドへの道」など、すべてでアカデミー賞をとったモーリス・ジャール氏に全部頼んだんですよ。その音楽もすごくいい。非常に意欲のある作品ができたのではないかと思っているんですが、もう試写はご覧になりましたか。

名取――いえ、まだなんです。音が全部ついてから見たいと思ってます。

徳間――舛田利雄監督とは、これが初めての仕事ですか。

名取――はい、今回が初めてなんです。

徳間――彼は"知性あふれるガラッパチ"でしょう(笑)。

名取――ホント。ピッタリの表現ですね。

徳間――愛情豊かだし、俳優さんに対する演技指導なんかも、非常に常に入ってるし。的確にポイントをついてますよね。

名取――本当にね。

徳間――どうでした? ああいう監督と仕事をやってみて。

名取――楽しかったし、いろいろ学ぶところがありました。何か、男の人の大きな懐に触れた、という感じでした。

徳間――相手役は渡瀬恒彦さんでしたが、彼も初めて?

名取――いえ、渡瀬さんとはテレビやほかのお仕事で何度かご一緒してるんです。男らしい方ですよね。渡瀬さんも硬派でしょ。

徳間――そう硬派ですね。男っぽい、男の臭いのする役者だからね。全体のできばえは非常にいいという評判ですね。特にあなたの演技が迫真の演技だというので、評判いいですよ。

名取――とんでもないです。

徳間――「首都消失」の中での苦労話はありますか? なにせ、東京が全機能麻痺してしまうという話ですからね。「日本沈没」に次ぐ、首都圏全体の消失ですから(笑)。メカニズム的な形でSF小説を映画化したというものですから、すごく苦労した場面もあると思うんですが。

名取――私、ああいう特撮みたいな映画、初めてだったんです。て、テーマが"雲"でしょう。

徳間――雲が東京全体を覆っちゃう話だね。

名取――だから雲の中を撮るというので、雲のトンネルを特撮用に作ったんです。煙とガスで。スタッフはマスクをかけてるんですけど、五分でもう真っ黒になっちゃうくらいなんですよ。なのに俳優はマスクかけられないし――。

徳間――相当、苦しかった?

名取――もう最初、目も開けられないし、息も苦しいし、どうしようと思いました。でも人間ってすぐ慣れちゃうんですね(笑)。

「ゴキブリみたい」っていってたんですよ(笑)。

徳間――そのガスは、体に毒なんですか?

名取――撮ってるときは大丈夫ってことでしたけれども、あとで打ち上げの席では多少毒もあったという話で(笑)。でも、特撮班の煙はもっと毒だったという話をうかがって。そういう皆さんの苦労がありましたね。

それに、煙の具合と風の具合のいいときと、俳優のテンションが上がったときとを狙ってるんで、感情が盛りあがってきても雲がダメとか。ヤマ場のシーンがすごく大変でした。それと、最後雲に向かって行く雨のシーンが三日間徹夜でしてね。夜中にエキストラの方が何百人って来て、消防車みたいなのでたくさん雨を降らせるし、火薬は使うし、ものすごく大変な撮影でしたね。水びたしのままで、体じゅうどろどろでね。朝までやって、帰って、またすぐ出てきて朝までやってというのが続きました。とにかく、人も車もものすごい量で。それが画面に迫力という点で出なくちゃ意味ないけれど、舛田監督の計算ですね。あれは舛田監督でなくては撮れなかったんじゃないかしら。

徳間――それと、特撮監督の中野昭慶さん。この人はなんといっても特撮では日本一ですからね。舛田監督と中野特撮監督ががっちり組んだ形で、大スペクタクルSF小説を映像化したわけです。SFっていうのは映像化しにくいんですよね。それをみごとに成功させたということですからね。

名取――私たちは五分で息がつまっちゃうような煙の中で、監督やカメラの人は全カットですからね。すごい熱気なんです。そういう中で仕事ができたっていう、ある種の感激と興奮がありました。十年間、女優をやってきて初めてですね、ああいう感動を味わったの。

徳間――では、「首都消失」の成功を祝して、乾杯。

顔が時代劇してますから!?

徳間――それから、来年元旦の夜放映予定のドラマ「太閤記」。これにお出になるんですってね。TBS系で、四時間半という新春特別企画だそうですね。ここではどんな役ですか。

名取――"ねね"の役です。

徳間――ああ、太閤秀吉の正室ですね。キャストは秀吉が柴田恭平さん、織田信長が松方弘樹さん、明智光秀が千葉真一さん。そして岡本喜八監督ですね。あとはどなたが?

名取――架空の役で夢御前を松坂慶子さん。東映の映画に出た女優さんが、御礼奉公でみんな出るんです(笑)。

徳間――時代劇は初めてですか?

名取――いえ、時代劇は多いんですよ。ほら、"顔が時代劇"してますから(笑)。

徳間――いえ、いえ、現代的ですよ。

名取――私、顔がアンティックだから(笑)。時代劇って割と多いんですけど、あのフリワケのカツラ、あれが大嫌いで(笑)。日本髪の芸者さんのほうがいい。

徳間――芸者役は似合うでしょうね。

名取――よい妻の役は大変。妻より愛人のほうがいいわって言ってます。

徳間――映画とテレビドラマと舞台があるわけですけど、この中でいちばん好きなのは何ですか?

名取――やっぱり映画ですね、いちばん好きなのは。

徳間――どういうところが好きですか?

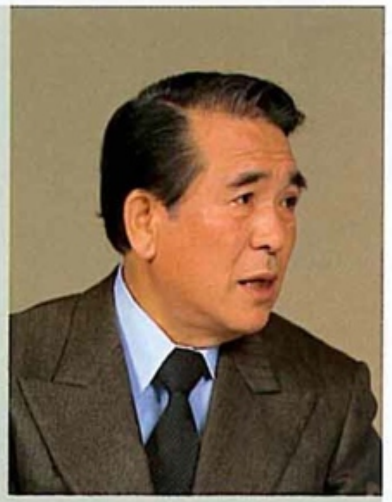
名取――みんなで作り上げる世界っていうか。完全に虚構のものを作り上げるには、やっぱり映画が一番だと思います。それに贅沢できるし、あとに残るでしょ。残るのは恥ずかしいけど(笑)。

徳間――残るということは、演技者として大きな財産だから。舞台はどうですか。

名取――舞台は結局一度しかやったことないんです。同じものを二年後に再演したんです。

徳間――何ていう芝居?

名取――「タンゴ・冬の終わりに」。蜷川幸雄さんの演出、清水邦夫さんの書き下ろしです。平幹二朗さんの相手役で出していただきました。やはり、それはそれで迫力がありましたよ。毎日同じことを演じてるんだけど、不思議と新鮮でしたね。やはり人との出会いですね、きっと。要するに作品。本と人ですね。



徳間康快

大正10年10月25日、神奈川県横須賀市生まれ。早稲田大学卒。読売新聞本社記者を経て、徳間書店、大映、徳間ジャパン、東京タイムズ社など、23社を主宰、経営する。

根がものぐさなんです、私

徳間――名取さんは神奈川県横須賀市の生まれだとお聞きしましたが、実は私も横須賀なんですよ。

名取――びっくりしました。

徳間――横須賀っていうのは、非常に美人で意欲的な女優さんが最近よく出るんですよね(笑)。その横須賀に生まれて、厚木高校へ進まれた……。

名取――そうです。

徳間――この厚木高校っていうのは県下でも名門ですよ。たいへん古い学校ですよね。

名取――ええ、古いです。て、当時は男子ばかりの学校。八〇パーセントが男子生徒でした。

徳間――ただ、あなたはその高校時代は、遅刻・早退・欠席が非常に多くて、学校でも有名だったという話があるんですが(笑)。

名取――そうです(笑)。

徳間――どうしてそんなに多かったんですか? 何か理由があったんですか。あまり学校に行きたくないという……。

名取――そんなことないですけど。根がものぐさなんです、すごく。だから雨が降ってるとか曇ってると、「今日は家で、本でも読んでいようか」って、一日じゅう本を読んで終わっちゃうんです。それて、あまり欠席が続いたりすると先生が、「五時間目か六時間目の途中でもいいから来なさい。そうすれば遅刻だから。朝五分遅れても遅刻だけど、五時間目遅れても遅刻なんだから」って(笑)。ちょっとでも顔出せば欠席にならないからって。だから、午後から社長出勤してました(笑)。とんでもない話ですね(笑)。それに父もうるさくなくて。「行きたくなければ別にいいよ」という父親だったんです。困るのは自分だし、休みたければ休めばいいという感じでしたね。

徳間――ずいぶん放任主義的なお父さんですね。

名取――だから、今日は一日じゅう、本を読んでいたいなと思うと、ずっと本を読んでいるし、寝ていたいと思えば寝てて、たいていお昼過ぎから学校へ行って「おはよう」なんて……。

徳間――あなたはきっと子供の頃から美人だったんだろうから、男性教師があなただけ特別に甘くしたんじゃないですか。

名取――そんなことはないですよ(笑)。

徳間——しかし、教師として、あるまじき態度ですな(笑)。
名取——すみません。だから三年のときに、就職したいといったら、こんな出欠状態じゃどこにも行けないから大学しかないね、といわれました。
徳間——それで青山学院大学へ?
名取——ええ、まあ、高校が進学校なもので……。
徳間——映画界に入ったきっかけは何ですか?
名取——青山学院の広告研究会に入ったんです。それで化粧品の広告を研究していて、カネボウ化粧品のサラダガール・キャンペーンのコンテストに出たら残っちゃって。
徳間——一般公募の?
名取——ええ、それが東宝とカネボウの協賛だったもので、そのまま東宝の専属みたいになったんですね。
徳間——そうすると、昭和五十一年にサラダガールで応募して当選して、「星と嵐」に出たんですか?
名取——それは出たというより、駆け抜けた、という感じですね。
徳間——その次の年の五十二年に、TBSテレビの連続ドラマ「おゆき」に出たんですね。これが本格的デビューの第一作目ですか?
名取——ええ、そうです。まだ、大学一年生でした。
徳間——お若いときですね。こりゃ、やっぱり厚木高校時代の遅刻・欠席常習犯の度胸のよさで、一挙にチャンスをつかんで花開いたみたいなところがあるんでしょうね。
名取——普通の若い子でしたから、好奇心のかたまりでしたね。まだ何にでもなれると思ってたんです。学校ではまじめに教職課程も取っていたし、将来は先生にも、普通のOLにも、普通のお嫁さんにもなれると思ってた。で、ちょっと女優も開かれた道だからやってみようかという程度で……。

女優って文化人化してないとダメ

徳間——今はどうですか?
名取——気がついてみたら、普通の女にもなれないし、かたぎのお嫁さんにもなれない(笑)。
徳間——そうすると、今はこの道一筋で生きていこうという意欲は持ってますね。
名取——そうですね。でも、まだそんなには。この道一筋、芸道百年みたいなものはないですよ(笑)。ただ、女優がすごく好きになってきました。
徳間——好きになってきた!?
名取——ずっと続けていけたらいいなって。八十歳までやってたら名優といわれるかしらというような……。
徳間——「せめて演じているときは、ふだんと違って、役にそってかっこよく生きたい」って、あなたいってますよね。こういうことって、相当な大女優でないと言えませんよ(笑)。
名取——いえいえ、今の子は考えないで言いますから(笑)。ただ、今の女優さんは、文化人化してないとダメみたいなところがありますよね。昔のように、ただ伝説的にきれいというだけでは、もう辛い時代になってきてるでしょ。
徳間——飽きられちゃうからね。それに人気のサイクルが速いし。
名取——ずっとやっていくためには、やっぱり中身が備わっていないと、画面に出ちゃいます。
徳間——顔にも、演技にも、しぐさにも出るからね。やはり知性とかインテリジェンスがないとね。
名取——だからこそ、少し人間として磨きがかかるようにしたいと思ったりしています。
徳間——要するに、これからは一途に徹してるだけでは事足りるというのではダメですからね。国際的に活躍できる意欲、気持ちをもっていないとね。あなたがいわれるように、知性のないスターというのは、ますます存在感がなくなるんじゃないかな。
名取——むずかしい時代ですね。
徳間——それに、国際的に評価が高まるような仕事を、今後も続けていこうという意欲がない人はダメなんですね。この二点は重要なポイントだと思います。

ニール・サイモンの作品に登場する女性のような役を演じたい

徳間——これからやってみたい役は、どんなものがありますか。たとえば、あなたは

読書量も相当だろうから、「この本は私のものだ、この役は私以外にはできない」という役はありますか?
名取——そうですねぇ。ただ、日本の中の女性像、日本映画に出てくる女性像って、好きではないんです。
徳間——たとえば、どういうのが好きなの?
名取——ニール・サイモンの戯曲や映画「グッバイ・ガール」などに出てくる女性像とかね。やはり今の若い人は、前向きな本当にバイタリティのある女性がいいと思うんですよ。だから、ドライで、めちゃくちゃで、かわいいタイプ。たとえば女優でいうと、「白いドレスの女」のキャサリン・ターナーとか「俺たちに明日はない」のフェイ・ダナウェイとか、「第二章」のマーシャ・メイスンとか——。
徳間——ああいったバイタリティをもった女優が好きですか。
名取——ハチャメチャなのがいいなって思うの。なんか日本って、じっと耐えてる待つ女が"勝ち"みたいなものが多いでしょう。
徳間——それは旧人類の、それも一番先に滅亡するタイプになってしまう。今はそうでもないでしょ?
名取——でも多いですよ、日本映画のヒロインには。あと、必ず裸が出てこないとダメとか(笑)。すてきな女性像って、アメリカのエッセイとか探偵物に多いですよ。日本だとどうして湿り気が多くなっちゃうのかな。
徳間——でも逆に、あなたは着物も好きですよね。
名取——好きです。
徳間——自分でも似合うと思うでしょ?
名取——体型的に(笑)。洋服より着物ですね。
徳間——あなたが狙っている、バーバリズムのある非常に生命力豊かな女優像と、着物が好きで、和服が似合うというのは、意外とピッタリ合うものだと思いますよ。日本人的で、なおかつコスモポリタン的な活躍をめざすという形でね。でも、まだ合作映画には出たことないですね。
名取——ええ、そうなんです。
徳間——国際的な、たとえばフランスとかイタリア、アメリカから望まれた場合、ふたつ返事で引き受けますか?
名取——やはり、台本を読んでからお返事します(笑)。
徳間——そりゃそうだ。ギャラもよく考えて(笑)。
名取——ギャラはどうでもいいですけれど、本の内容のいいものだったら、お金を払っても出たいくらい。
徳間——出たい?
名取——はい。

名取裕子(女優)

昭和32年8月18日、神奈川県横須賀市生まれ。昭和51年、青山学院大学在学中にカネボウ化粧品の「サラダガール」キャンペーンの一般公募を通り映画「星と嵐」に出演。昭和52年TBSテレビ小説「おゆき」で本格デビュー。テレビでは、「金八先生」(TBS)、「けものみち」(NHK)、「春の波濤」(NHK)等、映画では、「序の舞」「彩り河」「時代屋の女房・2」等で活躍。また、「タンゴ・冬の終わりに」で初舞台を踏むなど、幅広い活躍をしている。正月映画「首都消失」(徳間書店・大映・関西テレビ)で主演するなど、今いちばん輝いている若手本格派女優である。

徳間——アメリカには何度くらい行きましたか。
名取——五、六回かな。
徳間——仕事で?
名取——ええ。
徳間——じゃ、ニューヨークのティファニーなんかに行ったりしましたか。何か買いました?
名取——はい。高い物は買えませんけど。
徳間——でも、あそこにはいい物があるでしょ。いろいろと買いたい物があったんじゃないですか。
名取——でも宝石は、若さっていうアクセサリーがなくなってからつけたいですね。ちゃんと似合う顔になってからつけたい。つけてドキドキするようなというよりは、生活にちゃんと溶け込むようなアクセサリーがいいなって思います。
徳間——たとえば、どういうものですか。
名取——今は、シンプルなもので一本だけの鎖とか、プレーンな指輪とか。ただ私たちの仕事は、仕事場に行くと全部はずさなくちゃいけないんですね。それで役の中に入るわけですから。そのとき、もしなくなったりすると、スタッフの方とか周囲がイヤな思いをすると思いますしね。それでアクセサリーはつい千円のデジタル時計だけにするとか(笑)。逆にその役になるために必要なアクセサリーだからと、自分で買って持っていくこともありますが、やはりうるさいですね。芝居の邪魔になるほどのものをつけたくないっていう気持ち、ありますね。

結婚って、なにか"事故"みたい!?

徳間——名取さんは、お見合いしたことありますか。
名取——ないんです。したかったんですけど。
徳間——ご両親が「一度会ってみたら」とかおっしゃったことはない?
名取——ウチは親がとてもできた人でして(笑)「こんな親でもサジを投げるような娘

を人様の前になんか出せません」といってます(笑)。一度もそういう話はなかったですね。

徳間――お見合いをしてみたいという気持ちはないですか。

名取――ものすごくあります。今だってしたいし、お嫁に行きたい。でも、もうこの年だから、子連れの再婚しかないと思ってるんですけどね(笑)。

徳間――そんなことないですよ(笑)。でも、女優さんに「見合いして結婚する気あるか」って叩くと、みんな「ある」って言うんだよね。

名取――それは本気ですよ。ただね、やっぱり女優を、お嫁さんにもらうってマジメに考えたら、こんなにやっかいな女はいないですからね。普通の男の方はごはんを作ったり、家庭のことは奥さんにしてほしいっていうけれど、それはまず無理ですからね、物理的に。だから普通の奥さんのようにはできないけど、「これだけは守ろうね」という、ふたりの約束だったら守ります。全部が全部、普通の専業主婦のようにはできないですよ。

徳間――私の知ってるご夫婦は、おふたりとも非常に有能で仕事のできる方なんですが、結婚するときに、「私はおさんどんはいたしません。その条件でよければ結婚しましょう」といって結婚したの。だからいつもホテルで朝昼晩と食事してる。

名取――最初からそういうふうにしておいて、たまに朝ごはんを作ると感謝されるでしょ(笑)。

徳間――でも作らないらしいですよ。

名取――私ならきっと「しません」といってて、たまに作る。そうするとありがたがられるから(笑)。でも「します」っていっていてしないと「ウソつき」っていわれるから(笑)。

徳間――そのおふたり、それがずっと続いてる。そういうケースもあるんだね。

名取――旦那様の理解があればいいんですね。そういうことが我慢できる人なら。

徳間――だから、いろんな結婚生活の形態があると思いますね。名取さんだって、本当に惚れた人とどうしても家庭を持ちたいという気持ちになることもあると思う。やはり、惚れた男と一緒になって、家庭をもって、自分たちの愛する子供を産んで育てて、という姿が基本の形だからね。そういう男性ができたら、結婚はしますか?

名取――そうですねえ(笑)。でも結婚ってタイミングだから。何か事故みたいなものて――。

徳間――事故というのはないでしょう(笑)。

名取――でも、結婚したいなって相手が思った時期に、自分がまだやり残した仕事をしたかったとか、自分が結婚したいなって思うときには、相手がそういう気持ちにならなかったり、そういう人がいなかったりして……。

徳間――タイミングがズレるんだね。そういうことは何回ぐらいありましたか(笑)。

名取――そんなにございません(笑)。

短編小説のようなホテルのバーで

徳間――ホテルのバーを利用するチャンスはありますか。

名取――ええ、待ち合わせの場所とか。

徳間――それは仕事の待ち合わせ?

名取――仕事も、プライベートも(笑)。

徳間――名取裕子がひとりお忍びで行って、カウンターの隅でひとりで飲む。心の傷をいやす、あるいは心の喜びをかみしめながら飲むということはありませんか。

名取――東京ですと、いろいろと写真週刊誌がうるさいですから(笑)。ホテルのバーでくつろいでいても、出口のところで写真撮られちゃうこともありますからね(笑)。ついつい東京では、ね。でも地方へロケで行ったときにはひとりで、京都などではよく行くことあります。本当は東京のホテルのバーのほうが、自分もわかっているから落ち着くんでしょうけど。

徳間――そうね。そういう心配はあるでしょうね。

　でも私は、女優さんにホテルのバーを使ってはいかがですかとよくいうんです。品格が高いし、バーテンダーの諸君といろんな話ができて、気分転換には最高の場所ですよって。

名取――そうですね。ホテルというのはすべて贅沢ですね。短編小説のような贅沢な気分を味わえる。自分を簡単にそういうヒロインにしてくれる空間でもあるし、背伸びさせてくれるんですよね。

徳間――名取さんも、今後、ホテルのバーをできるだけ使ってみてください。ちょっと寄って「この間の『ステア』、読んでくれた?」ってね。

名取――そうですね。ぜひ今度はいい女になって(笑)。

徳間――お酒はあまり飲まないんですか?

名取――そんなに強いほうじゃないんです。ワインとかもいただきますけど、ホテルのバーだとブランデーが多いですね。あとは、ほとんどが食事のあとですからリキュールの甘いものをいただきます。

徳間――寝酒はやりませんか? くやしいことがあったときとか、失敗したときとか。

名取――それはやるの(笑)。そのときもブランデーが多いですね。

徳間――量はかなり?

名取――いえ、濃くしてグウッと(笑)。

徳間――お湯割りですか? それとも生で飲むんですか? 水割り?

名取――だいたい、クラッシュ・アイスですね。水割りはダメなんです。おなかチャポチャポになっちゃうので。

徳間――このドン・ペリニヨンのロゼはどうですか?

名取――とてもおいしいシャンパンですね。すっきりしてて。

徳間――では、今日はこれから、これを全部ふたりであけましょうか(笑)。

STIRY ESSAY

魚の味　作家 近藤啓太郎

酔狂雑記――21

私の知合いに釣り好きのお医者さんがいて、今年の夏はカナダへ釣りに行き、大きなシャケを航空便で送って下さった。新鮮なのでさっそく塩焼にして食べたが、油気がなくてうまくなかった。期待はずれて、私はがっかりした。

　考えてみれば、夏に生シャケを食べたのは初めてであった。シャケは塩物を毎年食べているので、旬を忘れていたのがいけなかった。実は鮮度も大事だが、それ以上に旬が大事なのである。

　シャケは冬が旬で、夏は時期はずれである。シャケと反対なのがスズキであって、夏はうまいが冬はまずい。私は房州鴨川に住んでいるので魚をよく食べるが、放卵した後のスズキほどまずいものはない。夏のスズキのうまさに比べると、全く別の種類の魚としか思えないくらいである。

　スズキに限らず、卵を腹に持っているうちはけっこう食える魚が多い。が、放卵後の魚はどれもこれもまずくて食えたものではない。

　近年、下りガツオがうまいと言われるようになった。確かに、九月下旬から十月初旬にかけての油の乗ったカツオはうまい。が、過ぎたるは及ばざるが如しであって、十月も中旬すぎになると、油が乗りすぎて何とも妙な味である。マグロのトロはうまいが、カツオのトロは形容のしがたい味であって感心出来ない。第一、油の乗ったカツオは獲れてすぐに食うのはよいが、ちょっと日時がたてばたちまち油がまわってダメになる。東京あたりで下りガツオがうまいなぞと言っている人がいるとすれば、これは魚の味のわからぬものである。

　カツオは何と言っても、五月が最もうまい。香りも佳いし、さっぱりとした味であるのに何とも言えぬうま味がある。私はカツオが大好きであるが、今年は不漁であった。大体、不漁の魚はまずく、大漁の魚はうまい。大漁のときのカツオは安くてうまいのだから、これほどけっこうなことはないではないか。

　今年はサンマも不漁らしい。大体において近海沖ものの魚は不漁のようなので、冬のイワシが心配である。現に、ソウダガツオも今年は不漁なので、私はがっかりとしている最中である。

photo by Chizuo Sakurai

　初秋から中秋にかけて、あまりうまい魚はないのだが、最も安くてうまいのがソウダガツオの刺身である。ソウダガツオには種類があってくわしくは何と言うのか知らないが、大きなのがうまい。ただし、血あいを食ってはいけない。あたる場合が多いからである。ソウダガツオはカツオの類ではなく、サバの類だという。

　今年は沖ものが不漁のせいか、底ものがうまい。自然とはなかなかよく出来ているものであって、ヒラメが八月の終り頃から例年になくうまいのである。ヒラメは刺身もうまいが、煮つけもうまい。ある百科辞典にヒラメの煮つけはまずい、と記してあるのを見て私は驚いた。

　この記事の筆者は、ヒラメの新鮮なものの煮つけを食べたことがないのではないのか。東京の魚屋あたりのトウフみたいな古いヒラメを食べたのではないのだろうか。あるいは煮方を間違っているか、どっちかである。

　何しろ、ある婦人雑誌では料理研究家なるものが、白身の魚を煮るときはうすいショウユでなければならないなどと言っているのだからあきれてしまう。水でうすめたショウユで煮たならば、新鮮で旬のヒラメもまずくて食べられない。魚の煮つけは、白身であろうと赤身であろうと、生ジョウユで煮るに限るのである。

　また、ヒラメは大きければ大きいほどうまいと思っている人が多い。が、ヒラメは二キロ前後までのものがうまい。四、五キロもある大きなヒラメよりは、一キロ前後のソゲと呼ばれるものの方がうまいのである。

　タイにしても同様であって、二キロまでのものがうまい。ヒラマサにしても、二キロ前後のものがうまいのである。そして、うまい魚はどれも身が厚い。身のうすい魚は、どれもあまりうまくない。もっとも、養殖の魚は太っていてもまずい。私は特に養殖もので嫌いなのは、ハマチである。あのべったりと厚い油身だけは、たまらなく厭だ。妙な臭いがするし、不自然な味である。あのハマチを好む人の神経がわからない。味覚以前の神経の問題だと思っていたが、近年ようやくハマチを嫌う人が多くなってきたというが、当然のことであろう。

　近頃は活魚料理というのが東京では流行のようだが、あれをうまいと言っている人も私にはわからない。せまい水槽の中で無理に生かされている魚ほど、油がぬけて身は弱り、まずいものはない。魚は生きていればうまいというものではないのである。

未知なるものへ

三輪主彦

みわ・かずひこ　1944年、大分県生まれ。高校教諭のかたわら、世界を駆ける冒険者のグループ「地平線会議」、「沙原の会」を主宰。自ら旅した国も30数か国を数える。

世界の最高峰エベレストのてっぺんにもうすでに二千人の人が登ったという。エリザベス女王の戴冠式の日に合わせるように、英国のハント隊のヒラリーとテンジンの二人が初めて頂上に立ったのが一九五三年。それから三三年。一年に平均六人ずつが頂上に立ったことになる。ハント隊以前にも各国のよりすぐりの登山家たちが頂上をねらった。その中には「なぜ山に登るのか？」の質問に「そこに山があるからだ」と答えたといわれるマロリーもいた。彼が最初の登頂者だという人もあるが、登ったまま下山しなかったので真相はわからない。

現在は酸素を使って登っても話題にもならない。厳冬期でさえ、酸素なしで登れるようになってきている。その原因は当時とは比較にならないほどに進んだ装備のせいだといわれている。しかし当時に比べて山が低くなったわけでもないし、酸素の量が変化したのではないのに、装備の差だけで、これほどおおぜいの人たちが頂上に立てるだろうか。体力的には昔の人たちのほうが強かったのではないかという意見もある。だのに毎年次から次へと頂上に立つ人が出てくるのは、まさに〝情報〟のおかげなのではなかろうか。「人間がすでに登っている」という情報は「自分にも登れる」という自信を与えてくれる。困難な箇所で行きづまったときも「誰かが通ったことがある」というのと「今まで誰も通れなかった」というのでは気分的にまったく違ってくる。最初に登った人と、二番目の人とでは、月とスッポンほどの違いがあるのだ。〝人類史上初めて〟という行為は、何が何でも大変に偉大なのであり、無条件に尊敬すべきことなのである。

今から二十年ほど前、ヒマラヤの山の中には、まだまだ人類にその頂を穢(けが)されていないものがいくつもあった。一九六八年の冬、私と友人二人で偉大な行為をすべくカラコルム山脈(大ヒマラヤ山脈の西北部)の中にあるバツーラ山群の麓にいた。チアンタール氷河を登っていけば未登の七千メートル峰に行けるはずだった。半分本気で、もしかしたら頂上へという気にもなっていた。しかし氷河の末端の氷壁を登る時点で、もう息切れしてしまった。氷河の青氷(ブルーアイス)は今までに経験したことがない硬さで、私のなまくらピッケルは最初の数フリで、あえなくポッキリと折れてしまった。それでも横っちょから氷河の上に出てみたがその先に何段もの氷壁がそそり立っている。三日間の悪戦苦闘もむなしく、進んだ距離はわずか三百メートル。高度は四千メートルにも達していなかった。

「とてもオレたちの手におえるものじゃない」と早々とあきらめてしまった。仲間の声援を受けて横浜港から旅立ったのに、富士山の高さまでしか行けなかったのだから顔向けもできない。今だったらトレッキングの人たちだって五千メートル以上のところまで行ってしまう。私たちの到達高度ではヒマラヤの登山口にさえ達していないし、夏ならばもっと高いところで羊が草をはんでいるのである。

もし詳しい情報をもっていれば、もう少し先まで行けたであろう。しかし先の見えない恐怖と絶望感に打ちひしがれて、すごすごとひき返してしまったのである。大自然に対したときの自分の限界はこの程度であることを身にしみて感じ、あらためて、初登頂の先人たちの偉大さを知ったのである。

今年の夏、久々に先の見えない旅を経験してきた。別に人類初の場所に行ったわけではない。それどころか人間のウジャウジャいるヨーロッパなのである。駅に着けば日本語のガイドマップまで置いてある国なのだから、先が見えないことなどないだろうといわれるかもしれない。確かに、どこそこの何というレストランの何はうまいとかいう情報まであるのだから、未知の要素などほとんどない。しかし地下鉄に乗って移動しているような、もどかしい気持ちがしてしかたがなかった。その原因はヨーロッパなら詳しい地図なんて持っていく必要などないだろうとタカをくくっていたためである。ある都市に着けば市街図をもらって歩き回ることはできるのであるが、その都市まで、どう移動してきたかがわからないのである。たとえば英国から大陸へ移動するのにドーバーからベルギーのオステンド港に向かったのだが、船がどのへんの海を通っているかよくわからないのである。途中の経路がわからないというのは地下鉄の経験とよく似ている。初めての駅では、地上に出た瞬間どちらの方向に行ったらいいかわからないのと同じである。便利さだけからいったらよい乗り物なのかもしれないが、地下鉄ほど人間性を無視したものもない。自分が移動する方向ぐらい自分で確かめたい気がする。私は初めての都市では絶対に地下鉄に乗らない。バスに乗るかさもなければ歩く。自分の目できっちりと行き先を見定めないと不安でしかたがないのである。

・ある民俗学者がインドネシアのバリ島での子供の方向感覚についての報告をしている。小さな集落にいた学業の優れた子供を町の学校にやることになり、車で町まで連れていったところノイローゼのようになり、まったく勉強がはかどらなかったという。ホームシックと判断して元の集落に帰したら元気がでたので再び町に出したがまた同じ症状になった。何回か繰り返すうちに町まで徒歩で行ったらその症状はピタリとおさまった。車で移動したため、この子供は故郷と自分のいる位置がわからなくなったので大変な不安感をもちノイローゼ状態になったのだと判断されたという。歩いていけば自分の目と足で確かめることができるのだから、安心できるということなのだろう。

私たちは乗り物で移動するのに慣れてしまっているから、これほど極端なことはないが、それでも地下鉄の場合のようなとまどいを感じることがよくある。私はバリ島の子供と似たところがあり、できるだけ自分の足と目で行動方向を確かめたい気がしている。飛行機に乗っているときでさえ、いつも眼下を眺めて、地図とつき合わせていないと不安になってくるのである。今回はモスクワ経由のロンドン行きを選んだのだが、シベリア上空は雲だらけで一気にヨーロッパに空間スリップをしてしまった。自分が地球上のどこにいるのかがわからなくなり不安が増大したので、何をおいてもまず真っ先に、地球の経度のもとになっている旧グリニッジ天文台に向かった。もちろんロンドン名物の真っ赤な二階建てバスの最前に乗って経度〇度線を目ざした。ロンドンの市街は西半球にあるためバスは東に向かって行くのである。今でも経度の原点であり、世界の時刻の中心であるはずのグリニッジにはもう天文台も標準時の時計もなく、博物館となってしまっている。都市の明かりのために天文台はサセックスに移り、経済的事情のために世界時を刻む時計も維持できなくなり、その機能はフランスに移ってしまっているのである。グリニッジを通る線を経度〇度、世界の時刻の基に決めたのは今から百年前で、そう古い昔のことではない。それ以前は各国まちまちに勝手に時間を決めていたので、国際性はあまりなかったのである。

地球上での自分の位置を確かめると心安らかになり、やっと町中の見物に出かける気がしてきた。英国は昔来たことがあり、地図も手に入ったので、楽な旅ができたのだが、下調べをしてこなかったオーストリア、スイスに入ってからは、またメロメロになってしまった。何せ、ウィーンとインスブルックとジュネーブの位置関係がまったくわからないので、どの汽車に乗っていいのかとまどってしまった。このときの気分はまさに二十年前のカラコルムの氷河の上で錯乱状態になっていたときと同じであった。さっそく本屋に行って地図を買って、一日ゆっくりながめているうちに、やっと平静状態がとり戻せた。地図という情報源をもつと、それまで、いかに無駄道を通ってきたか実によくわかる。もっとも急ぐ旅ではないので、遠まわりもまた楽しいのではあるが、やはりまだるこっしい気持ちになってしまう。しょせん擬似未知体験にすぎないのだろう。自分にとって未知であることを体験することは、それで十分に価値があることではあるが、何も地図があるところで迷ってみる必要はない。まだ他にいくらでも、たとえば二つか三つの要素を組み合わせることによって未知の分野は開けてくるのである。ウィーンとジュネーブを自分の車で走ってみれば、それは未知への冒険になるはずである。また私の得意分野である自分の足で歩き、走ってみれば、もしかすると人類初の行為になるかもしれないのである。

地図というのは素晴らしい情報源である。ヨーロッパの人々は日本人に比べ地図が好きなようで、さまざまな美しいものが発売されている。日本の測量技術や正確な地図作りは定評があるが美しさ、使いやすさにおいてはヨーロッパの国の地図にはかなわない。どこの町の案内所にも素晴らしい地図が置いてある。この地図をながめながら、「未知なるものは何か」「どういう組み合わせをすれば人類初に近い偉大な行為ができるか」などと考えていると、いくら時間があっても足りない気になってくるのである。

チアンタール氷河

(右)ロンドン
(上)カラコルム山塊

(上)グリニッジ経度線
(左)ロンドン近郊の平原にある
ストーン・ヘンジ

HOTEL BAR IN THE WORLD

世界のホテル・バー[20]

"トップ・オブ・ザ・マーク"

ザ・マーク・ホプキンス・インターコンチネンタル、サンフランシスコ

"TOP OF THE MARK"

THE MARK HOPKINS INTER・CONTINENTAL, SAN FRANCISCO

カリフォルニア前史

ノブ・ヒルからサンフランシスコ湾を望むと、金門橋、ベイ・ブリッジから対岸のオークランド、そして近くは埠頭まで一望のもとに見渡すことができる。ただし、あの有名なサンフランシスコの霧に邪魔されなければの話である。

この気まぐれな霧のおかげで十六世紀末まで発見されなかったサンフランシスコ湾は、港としても理想的な入江であった。十九世紀中頃のゴールドラッシュと、太平洋方面への貿易拠点としてのサンフランシスコの重要性が、アメリカ大陸の東と西を隔てていた峻崖シエラネバダ山脈を越えて東西を結ぶ大陸横断鉄道を実現させた。その後、カリフォルニア北部の中心地サンフランシスコは、飛躍的な発展を遂げて今日に至っている。その黎明期の大立者、"ビッグ・フォー"と呼ばれた時の権力者たちは、自らの力を誇示するかのように、サンフランシスコの一等地ノブ・ヒルに競って邸宅を構えた。

今日、その四人の邸宅跡のうち三邸が彼地を代表する高級ホテルへと様変わりしているのは何かの縁であろうか。ザ・マーク・ホプキンス、スタンフォード・コート、ハンチントン・ホテル――。今回は、それらの中でもノブ・ヒルの頂点に立ち、景観の素晴らしさで群を抜く"ザ・マーク・ホプキンス・インターコンチネンタル"をご紹介しよう。

●

「カリフォルニアはインド大陸の左手の端に位置しており、女王カラフィアの支配のもとに黒人女性のみが暮らしている。男性はひとりもいない。すべての土地は黄金でできており、道端の石ころさえも黄金という島である」

これは一五一〇年に、スペインの作家ガルシア・モンタルボが発表した、カリフォルニアの空想ルポルタージュである。

ニュースペイン(現在のメキシコ)にいたスペイン人の中には、この「黄金伝説」に触発されてカリフォルニア島発見の旅に出た者も少なくなかったという。ニュースペインの支配者フェルナンド・コルテスもその一人であった。彼は一足先に発見されていたカリフォルニア島の突端に植民地を建設したが、コルテスの部下が付近を探索しているうちに、内海に流れ込むコロラド川を発見した。これにより、カリフォルニアは島ではなく、アメリカ大陸の一部であることが判明し、「黄金の島」伝説には一応の終止符が打たれたのである――。

サンフランシスコの天候は、実に気まぐれである。つい先ほどまで青空だったかと思うと、あっという間に霧に包まれてしまう。

スペイン人によるカリフォルニア探検のおかげで、サンディエゴ湾、サンタ・モニカ、ベン・チュラ等のいくつかの太平洋岸の湾や島が発見されたにもかかわらず、サンフランシスコ湾の発見が遅れたのはこの霧によるところが大きい。サンフランシスコ湾の発見は、十六世紀末まで時を待たねばならない。

一五六五年から、ニュースペインは、同じスペイン領であったフィリピン諸島との交易を始めた。太平洋を横断して、アカプルコとマニラを結ぶ往復九か月の長期航海だが、それを敢行するほど東洋の産物は魅力的だったようだ。これだけの航海には、途中、水や食糧の補給が必要であり、その中継地点としてカリフォルニアに注目したのは当然の成り行きだったであろう。

ニュースペインがカリフォルニアに注目したことには、もう一つの理由がある。十六世紀後半、スペインはイギリスと宗教上の問題で冷戦状態にあった。そのただ中にイギリス人フランシス・ドレイクが、カリフォルニアに上陸してきたのである。これがイギリスの新大陸支配のきっかけになることを恐れたスペインは、イギリスに対抗するためにも、カリフォルニアの拠点づくりの重要性をあらためて認識せざるを得なかった。

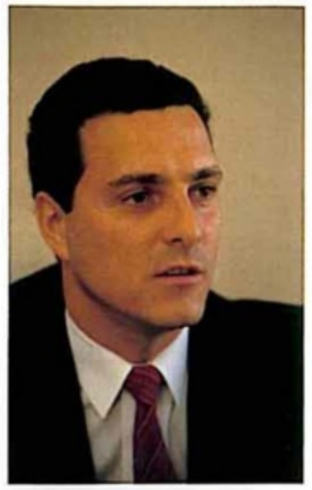
地形調査の結果、一五八七年にモロ湾を発見し、キング・オブ・スペインと命名、

サンフランシスコ湾沖より市街を望む

THE Mark Hopkins INTER・CONTINENTAL

C | A
  | B

A.ザ・マーク・ホプキンス正面入口
B.ロビー。カーテン越しにロアー・バーに通じている。
C.マルセル・P・ヴァン・エルスト氏（ゼネラル・マネジャー）



C | A / B

A.ジャン・ジャック・レーベル氏(フード＆ビバレージ・マネジャー)
B.ジュリー・ブルッツォーネ女史(プレス・リレーション)
C.ノブ・ヒル・レストラン

ここをマニラ貿易の中継地点としている。サンフランシスコ湾がセバスチャン・ロドリゲスによって発見されたのは、それから九年後の一五九六年のこと。以後、貿易の中継地点は、この天然の良港サンフランシスコ湾へと移るのである。

霧の中から浮かびあがってきたかのごときサンフランシスコ湾は、両端からせり出した半島部に囲まれる形で、太平洋と結ばれる海峡部が極端に狭い理想的な入江である。このような天然の良港が手に入るとは当時のスペイン人も予想できなかったであろう。サンフランシスコ湾は、当時の船乗りたちにとって、神が授けた理想の港であった。

黄金郷（エル・ドラド）へ向かう人

サンフランシスコを取り巻く地理上の環境は、西が太平洋の波濤にさえぎられている一方で、東側にはシエラネバダ山脈がそびえ立ち、デス・バレー（死の谷）と呼ばれる荒涼とした砂漠地帯が横たわっているというように、陸路からも容易に近づけない幾多の障害があった。

シエラネバダ山脈は、一万五千フィートのホイットニー山を擁する標高四千メートル級の切り立った山脈で、冬は雪が深く、山越えは困難を極める。また、デス・バレーは海面下二百八十二フィートと、全米で最も低い地点である。シエラネバダ山脈の南に東西約六十五キロ、南北約四百八十キロメートルで広がるこの砂漠地帯は、夏季の気温が華氏百二十度（摂氏約五十度）を超える完全な不毛地帯である。

カリフォルニア一帯が、シエラネバダ山脈以東より開拓が遅れたのは、この大自然の障害を考えれば無理からぬ話である。

ところが、十九世紀半ばになって、人々は敢えてこの大自然の障壁の彼方を目指して動き出したのである。十六世紀に伝えられた「黄金伝説」が現実のものとなったためであった。サッター砦で砂金が発見され、世に名高い〝ゴールドラッシュ〟が起こったのだ。

サッター砦の主ジョン・オーガスト・サッターの部下W・マーシャルが木材の切り出しに行き、アメリカ川支流のコロマで砂金を発見したのは、一八四八年のことだった。あっという間に砦内に広まった金脈発見のニュースが外部に洩れることを恐れたサッターは、「喋った者は縛り首にする」と厳しく箝口令を敷いたが、これほどの大事件を黙っていられないのが人の常で、なんと当のサッターやマーシャルまでもが秘密を洩らしていたのである。

金脈発見のニュースは、その年の八月にニューヨークへも届いた。ニューヨークで最大の発行部数をもつ『ヘラルド』紙の「カリフォルニア通信」欄で伝えられたのである。これはもう、単なる伝説でも噂でもない。まぎれもない金脈発見のニュースは格好の起爆剤となって、またたく間にゴールドラッシュを引き起こした。

早速、鉱山採掘の会社が設立された。総株主百五十名から十数名まで、大小とりまぜて無数に作られた会社は、それぞれに船をチャーターしてカリフォルニアへと向かった。東部諸都市で七百七十五隻もの船舶が動員されたという。一攫千金を夢みた人人で航路はあふれていた。

一方、陸路でカリフォルニアに向かう人人も十万人近くいた。旅費は海路より安いが、シエラネバダ山脈やデス・バレー越えは、想像を絶するものがあった。また、シエラネバダを越えるほかに、南下してテキサスやアリゾナ付近を迂回するルートもあったが、いずれも五千キロに及ぶ行程であった。

こうしてカリフォルニアに到着した人々は〝フォーティ・ナイナーズ（一八四九年に来た者の意。転じて山師の意味をもつようになる）〟と呼ばれ、その数は一八四九年だけで十三万人以上になった。当時、カリフォルニアの人口は一万人にも満たなかったから、一年間で十三倍以上になったわけである。さらに二年後にはその倍近くの二十六万人にも膨れあがり、まさに〝ラッシュ〟であった。

〝ビッグ・フォー〟

二十万人もの人間が金脈探しに押し寄せれば、いかにシエラネバダ山脈の東側まで伸びる広大な金脈とはいえ、すべてのゴールドラッシャーを満足させられるわけがなかった。一八四八年には一人当たり一日一ポンドは採れた砂金が、二年後には五ドル分にしかならなかったという。ゆえに、ゴールドラッシュ本来の金採掘で金持ちになった者はあまりいない。むしろ、ゴールドラッシュにあやかって、彼らに物資を供給した者たちの中から成功者が出た。

チャールズ・クロッカーもその一人である。ニューヨーク生まれのクロッカーは、幼い頃から商才に長けていた。彼は十四歳でカリフォルニアに入り、金脈探しをした。しかし、彼の持ち前の商才が金脈探しに早速に見切りをつけさせ、フォーティ・ナイナーズ相手に商売を始めさせた。サクラメントから山のキャンプに食糧や採鉱器材を運ぶ荷馬車屋がそれである。そして金がたまるとサクラメントで乾物を扱う店を開き、共和党にも入党した。

コーリス・ハンチントンも、フォーティ・ナイナーズからサクラメントで採金道具商となった。

マーク・ホプキンスは、ハンチントンのパートナーであったが、毛布保管業の創業者でもある。フォーティ・ナイナーズが夏、置き場に困っている毛布を買い取り保管し、翌年に何倍もの値で売るこの商売で、彼は大成功をおさめた。

この二人も、ともに共和党員である。

リーランド・スタンフォードは、ニューヨークで弁護士をしていた。先にカリフォルニアに来ていた兄に呼ばれたスタンフォードは、兄と一緒に採金道具や食糧品、雑貨を一手に扱う店を開く。彼もまた共和党の党員であった。スタンフォードが他の三人と違っているのは、金脈探しにまったく手を染めていないことである。

フォーティ・ナイナーズとしてカリフォルニアに入ったのも同時期で、商才にも長け、年齢も近かったこの共和党の四人は、やがて大陸横断鉄道の建設を行い、カリフォルニア最大の成功者となり、〝ビッグ・フォー〟と呼ばれるようになるのである。

大陸横断鉄道

サンフランシスコは、いまやアメリカ合衆国の西の玄関口として隆盛を極めているが、そのきっかけを作ったものは、実はゴールドラッシュではなく、東との交流だった。

一八四八年に始まったゴールドラッシュとサンフランシスコを拠点とする南太平洋諸島および中国との貿易に対する期待から、アメリカ連邦政府はカリフォルニアの重要性を痛烈に感じていた。その中心地サンフランシスコと東部を鉄道で結ぶことは政府の大きな課題となっていたが、路線決定への政治的配慮や技術的、経済的問題が足かせとなり、簡単に事を動かすことができずにいた。

その大陸横断鉄道が実現できたのは、〝クレイジー・ジュッダ〟と異名をとるセオドア・ジュッダという一人の天才的な鉄道技師の熱意によるところが大きい。彼は連邦政府やカリフォルニア州議会に働きかけるなど、非常に積極的に事を進めた。一連の運動が功を奏して、一八六一年にはカリフォルニア州議会の大陸横断鉄道特別議会で、大陸横断鉄道建設が採択された。この話に興味を示したのが、カリフォルニアの若き成功者たち、クロッカー、スタンフォード、ハンチントン、ホプキンスの四人であった。四人が大口出資者となり、ジュッダを加えた五人でセントラル・パシフィック鉄道を作った。

スタンフォードはすでにカリフォルニア州知事になっており、時の大統領リンカーンにも信頼が厚かった。南北戦争における貢献と引き換えという政治的取り引きで、セントラル・パシフィック鉄道会社は発足する。

次はアメリカ連邦議会での「鉄道法案」の通過である。ワシントンでの議会工作、ロビー工作が功を奏し、一八六二年七月に太平洋鉄道法が制定された。この法案では二つの鉄道会社の設立が義務づけられており、東から路線を延ばすユニオン・パシフィック鉄道と西から路線を延ばすセントラル・パシフィック鉄道が承認された。リンカーンとしても南北戦争の最中であり、南軍に対抗するためには、ぜひともカリフォルニアの農物産や金・銀が必要だったのだ。

彼らは続いて郡、州からの助成金獲得にも成功した。こうして一八六三年一月、ついにサクラメント河畔のアメリカ川と交差するあたりに鉄道建設の最初のショベルが入れられた。

しかし、その後、大陸横断鉄道より、それに伴う破格の助成金に魅力を感じていたビッグ・フォーに、ジュッダは首を切られることになる。そしてこの鉄道の天才であり、大陸横断鉄道敷設の最大の功労者は、何の名誉も得られぬまま、失意のうちに黄熱病でその一生を閉じた。

ビッグ・フォーはシエラネバダにさしかかる前に利権をもっと大きなものにしようと考えていた。ワシントンでのハンチントンのロビー工作が成功して、一八六四年七月には、さらに有利な太平洋鉄道法の修正案が可決された。

シエラネバダ越えに利権のうまみはできたものの、工事自体は困難を極めていた。駅馬車や地元住民の反対、それに労働力の不足などが工事の進行を遅らせていた。さまざまな利権がらみの反対はスタンフォードがその政治的手腕で解決させた。労働力に関しては約一万五千人の苦力（クーリー）（中国人移民）を使った。苦力は先に雇われていたアイリッシュやドイツ系の移民より低賃金で、なおかつ小さい体の中には屈強な山男たちに勝る力と技術をもっていた。

多くの苦力たちの犠牲の上にようやくシエラネバダ山脈を越えた工事は、平原を急ピッチで東へ進んだ。工事開始より六年たった一八六九年、オマハを起点として西へ進んできたユニオン・パシフィック鉄道と接合することになる。利権を追いかけつつ延びてきた線路の接合地点は、ユタ準州グレートソルトレイク北岸のプロモントリーという小高い丘の頂上だった。

しかし、アメリカ東部とサンフランシスコが結ばれたことで、カリフォルニアは思わぬ大打撃を受けた。東部とカリフォルニアでは経済力にあまりにも隔たりがあったのである。東部や中部から流れ込む製品や原材料のために商店は相次いで倒産した。また、新聞も東部の優れた印刷技術にはまったく立ち打ちできなかった。

逆に東部にとっては、東洋貿易の手がかりとして長年欲しかったサンフランシスコという天然の良港を手に入れたことが、大きなメリットとなった。

大陸横断鉄道で今やカリフォルニア州最大の権力者となり、〝ビッグ・フォー〟と呼ばれるようになったスタンフォード、ハンチントン、クロッカー、ホプキンスの四人は、彼らに対する不満の高まる中で、アメリカ合衆国の西の玄関口となったサンフランシスコの重要性にいち早く気づいていた。彼らはサンフランシスコ周辺の交通網を全て手中に収めるべく計画をたてていった。大陸横断鉄道工事たけなわの一八六五年には、サクラメントからサンディエゴに南下する路線を計画し、サザン・パシフィック鉄道を作った。また、南部や中西部から延びる鉄道は、ほとんどといっていいほどカリフォルニアを目指していたが、それらの鉄道の権利を買い占めながらサザン・パシフィック鉄道は南下し、ニューオリンズまで延びたのである。

このようにして大陸内部以西の鉄道網をすべて支配することに成功したサザン・パシフィック鉄道は一八八四年、セントラル・パシフィック鉄道と合併し、「サザン・パシフィック鉄道」となり、現在に至る基礎を作り上げたのである。
九千マイルの鉄道を支配し、船会社を経営、さらには数百エーカーの土地をもつビッグ・フォーの資産は、一八七〇年初頭で六千五百万ドルと推定される。十九世紀末に四人の支配したカリフォルニア州の土地は、その四分の一に達したといわれている。

ノブ・ヒルの邸宅からホテルへ

霧深いサンフランシスコ。ダウンタウンからケーブルカーで急斜面を上っていくと小高い丘に着く。ここが、今は高級ホテルの立ち並ぶノブ・ヒルである。
かつては、カリフォルニアで成功した人人が集まっていた高級住宅街であり、サンフランシスコの象徴である。ノブ・ヒルが〝貴族の丘〟という意味であることからも、いかに人々の誇りと羨望の地であったかが、うかがえよう。サンフランシスコ名物のケーブルカーはノブ・ヒルとダウンタウンを結ぶ足として、一八七三年に創業した。最盛期には十系統のケーブルカーがノブ・ヒルとダウン・タウンを結んでくまなく走っていたが、現在は三系統を残すのみとなっている。
マーク・ホプキンスもこのノブ・ヒルに居を構えたひとりである。愛する妻のためにサンフランシスコの街を眼下に見おろすノブ・ヒルに大豪邸を建てたのである。
また、スタンフォードとコーリス・ハンチントンも同様にノブ・ヒルに屋敷を建てている。
ノブ・ヒルはカリフォルニアで権力の頂点を極めたビッグ・フォーたちにふさわしい丘だったといえよう。
この三人の邸宅は、ホテルとなって現在に至っている。スタンフォードの邸宅はスタンフォード・コート(本誌七号にて紹介)に、ハンチントンの邸宅はハンチントン・ホテルに、そしてマーク・ホプキンスの邸宅は、ザ・マーク・ホプキンス・インターコンチネンタルになり、それぞれその格式を誇っている。
マーク・ホプキンスの邸宅は、妻メアリーのために建てたものである。ノブ・ヒルの南東に立つ贅を尽くした邸宅は、一八七八年に完成している。しかし、残念なことにホプキンス自身はその数年前に亡くなったため、泊まることはなかった。また、妻のメアリーもノブ・ヒルの邸宅には二、三年しか留まらず、故郷のマサチューセッツに戻ってしまった。故郷に戻ったメアリーは、七十三歳の高齢で二十歳年下のエドワード・シアレスという装飾家と再婚する。しかし結婚後間もなくの一八九一年、メアリーは七千万ドルという莫大な財産を残して他界した。遺産を継いだ夫のエドワードは、その中に含まれていたノブ・ヒルの土地と邸宅を一八九三年にサンフランシスコのアート・アソシエーションに寄付した。学校と博物館を建てることがシアレスの希望であった。
サンフランシスコは地震の多い土地である。ホプキンス邸の瓦解も、一九〇一年の大地震による。堅固な造りゆえに地震の被害は少なかったが、その後に発生した火災で邸は全焼してしまい、あとには土台と煙突のみが残るという惨状であったという。
その後、同地には小さなビルがいくつか建ち、シアレス氏の希望通り学校が建てられたのは、それから数年後のことだった。
このノブ・ヒルの頂上に、往時の大邸宅の面影を再現したホテルが出現するのは、それから約二十年後、ジョージ・D・スミスというデベロッパー兼鉱業エンジニアを生業とする男の着想によってである。
ノブ・ヒルを散策していた彼は、一等地に立つ学校の前に立ち、湾内からダウンタウンまでも一望のもとに見渡せるこの地にホテルを建てたらどうかと思いついた。そして早速、一九二五年にこの土地を購入、翌一九二六年十二月三日に、〝ザ・マーク・ホプキンス〟と命名したホテルをオープンさせたのである。ノブ・ヒルの景観を生かすために、十八階建てのホテルの客室からは、すべて外が見えるようになっていた。
これが、マーク・ホプキンスの邸宅がホテルとして再出発するまでの小史である。
その後、ホテルの運営は順調に行われてきたようである。一九六二年になると、スミス氏は引退するべくホテルを金融家のルイス・ルーリー氏に売却した。ルーリー氏から、現在はプロ野球大リーガーのサンフランシスコ・ジャイアンツのオーナー、ボブ・ブラリー氏の手に渡り、インターコンチネンタル・グループが二〇六三年までの借用権を有している。
二十階建て、四百六室の小ぢんまりとしたホテルながら、その格式はサンフランシスコでも一、二を競うといわれ、旧邸を模した豪奢な建物は、カリフォルニア名所旧跡地の第七百五十四号に指定されている。

サンフランシスコの象徴
〝トップ・オブ・ザ・マーク〟

さて、ザ・マーク・ホプキンス・インターコンチネンタルは、フード&ビバレージの分野でもサンフランシスコを代表する二枚の表看板をもっている。一方は、最上階のラウンジ・バー〝トップ・オブ・ザ・マーク〟、そしてもう一方はメイン・ダイニングの〝ノブ・ヒル・レストラン〟である。両者ともサンフランシスコという街に深い関わりをもち、ひいてはカリフォルニアの今日のワインや料理の動向を知るうえでもまたとない場所である。
〝トップ・オブ・ザ・マーク〟は、一九三九年につくられた。ホテル最上階のペントハウスを、三百六十度展望できるように改装したラウンジがそのスタートである。その眺望の素晴らしさは世界的にも有名で、サンフランシスコを訪れる観光客が必ず一度は訪れるといわれるほどの観光名所にもなっている。
しかし、その広いラウンジも、第二次世界大戦の時はセンチメンタルな情景であふれていた。というのも、サンフランシスコ港から出征する兵士たちは、このトップ・オブ・ザ・マークで家族や恋人、友人たちと別れの杯を交わし、母国を離れて戦場に赴くのが習いだったからである。兵士たちはトップ・オブ・ザ・マークでの最後の一杯をあとに船に乗り込み、家族や恋人はトップ・オブ・ザ・マークの窓辺から船が見えなくなるまで見送ったものだという。戦後四十年を経た今日でも、往時を偲んで、ここを訪れる人も多いという。ゆえに、市民にとっても、トップ・オブ・ザ・マークの名は、単なる観光名所としてだけではなく、二十世紀の歴史を語る地として深く心に刻まれているのである。
そうした想いを片隅に秘めながら、トップ・オブ・ザ・マークはサンフランシスコを代表するバー・ラウンジとして今もにぎわいをみせている。とくに週末にかけての夕刻、夜はたいへん混雑し、席が空くのを待つ人も毎晩という。
このラウンジでは食事を出しておらず、いわば夜景を酒肴にグラスを傾けるというオーソドックスな流儀を貫いている。ただ、ご多分にもれず、夕刻からはクラムやオイスター、シュリンプを載せたアペタイザーのシーフード・ワゴン・サービスを行っている。
その影響だけではなかろうが、ここでもカクテルに圧してワイン、とくに白ワインの人気が高まっているという。ザ・マーク・ホプキンスのワインの品揃えは特徴があり、後述のノブ・ヒル・レストランで大半を供しているが、ここトップ・オブ・ザ・マークでもシャンパン八種、白ワイン七種、赤ワイン七種と二十余種のワインを用意している。

B | A
D | C

A.トップ・オブ・ザ・マークのラウンジ
B.グレゴリー・フレイツ氏(トップ・オブ・ザ・マーク・アシスタント・マネジャー)
C.100万ドルの夜景が美しいトップ・オブ・ザ・マーク
D.トップ・オブ・ザ・マークから市街地を望む

フード&ビバレージ・マネジャーのジャン・ジャック・レーベル氏は、

「このラウンジもそうですが、全体としても白ワイン、とくにシャルドネの人気が高いですね。カクテルもいいんですが、その地位をワインに明け渡しつつあります。現在のカリフォルニアの流行は、食事とワインだといっても過言ではないでしょう。実際、近未来においてアメリカはフランスのワイナリーや料理店にとって一つの脅威になると思います。アメリカ人は情熱的で、何か自分の気に入ったものを見つけると、それに向かってまっしぐらに突き進みます。満足を得るためには、時間も金もありったけつぎ込む。今、カリフォルニア・ワインがそうです。ある銘柄は、もう完全にフランス物に比肩し得る存在になっています。白ワインが支持されるのも、こうした土壌があってのことです」

と語る。こうした傾向は、とくに昼食時に顕著とかで、かつてマティーニ・ランチョンと称された頃とは隔世の感がある。トップ・オブ・ザ・マークでは、日曜日は午前十一時から午後三時までサンデー・ブランチも供されている。

一方、グラスを片手に心ゆくまで酔い、語らう場としては、ロビー奥に〝ロアー・バー〟がある。午前十一時から午前一時までオープンしているラウンジで、毎夜、午後九時から閉店まで、エンターテインメントが催される。これはピアノ演奏だけでなく、お客さまがピアノの周りに集まって歌を歌うこともでき、バー内はリラックスした雰囲気に包まれている。昼間はカクテルとスナック、軽い昼食もとれ、午後はアフタヌーン・ティーにスコーンズやフレンチ・パスタリーと、時間帯に応じて幅広い対応がなされているが、夜はやはりマティーニを中心としたカクテルがよく出るという。

ちなみに、ロアー・バーの壁には次のような粋な宣言文が掲げられていたので、ここに記しておく。

"This bar is dedicated to those many souls who make drinking a pleasure, who reach contentment before capacity and whatever they drink can take it and remain gentlemen."

(このバーは、酒をたしなむことを至上の喜びとし、自らの限界に至る前に満足し、そしていかなる酒を飲もうとも紳士としていられる人々に捧ぐものである)

〝ノブ・ヒル・レストラン〟の目指すヌーベル・カリフォルニアン

トップ・オブ・ザ・マークがザ・マーク・ホプキンスの象徴的存在であるのに対して、一階ロビー左手奥にある〝ノブ・ヒル・レストラン〟は、ザ・マーク・ホプキンスのクオリティの象徴である。

この評価には、ゼネラル・マネジャーのマルセル・P・ヴァン・エルスト氏の功績が大きい。エルスト氏は、一九八三年にザ・マーク・ホプキンスに赴任してきた。その当時からノブ・ヒル・レストランは高い評価を受けていたが、それをさらに高めるために、彼はノブ・ヒル・レストランをホテルのキッチンとまったく分けてしまうシステムを採用した。六百名収容のバンケット・ルームや千二百五十名収容のレセプション・ルームなどで大規模な宴会等が催される場合、シェフはどうしてもそちらにかかりきりになってしまい、ノブ・ヒル・レストランのほうは他の人に任せるという弊害がでてくる。これではレストランのクオリティを維持することは難しいとの見地から、取締役次席シェフのピーター・モランシーに、ノブ・ヒル・レストランをいっさい任せてしまった。つまり、ホテル内に独立したレストランを作ったわけである。

エルスト氏によると、

「〝ノブ・ヒル・レストラン〟を独立させることで、このレストランの運営に一貫性が出てきます。ホテル内の他の場所で起きた問題に関しては〝ノブ・ヒル・レストラン〟の従業員たちの助けを借りないかわりにノブ・ヒル・レストラン内の問題に関しても彼らだけで解決させています。極端なことをいえば、ノブ・ヒル・レストランはホテルのお客さまよりもレストランに来られるお客さまを大事にしなくてはいけないのです。このことはどんなホテルにとっても、最も重要な点だと思います。この一点を行なうか否かが、平均的なホテル・レストランとよいホテル・レストランを分ける境目なのですから」

ということである。

席数約百席、料理はヌーベル・カリフォルニアンというこのレストランは、ディナーのみを供している。

サンフランシスコは一マイル四方に九十四軒ものレストランがあるというほどで、その密度は全米中最高である。当然のことながら、サンフランシスコの人々の舌は肥え、レストラン間の競争も厳しいものがある。その中にあって常に評判を保ち、なおかつクオリティを高めていくために、エルスト氏は〝フード・テイスティング〟というシステムを作った。

ノブ・ヒル・レストランでは、新鮮な材料を用いた品質の高い料理を出すために、三〜四か月に一度の割合でメニューを変えている。そのメニューの最終決定を下す前に、レストラン関係者と外部からのお客さま数名を交えてメニューの試食を行い、盛り付けから、分量、調理法に至るまで、時間を十分にかけて意見交換を行う。長いときには、それが七時間以上にも及ぶという。その結果を反映させたものが新しいメニューとして採用されるのである。外部から加わってもらうゲストは、政治家、ビジネスマン、外交官、ワイン・メーカーとさまざまだが、基本的に地元の人を原則としている。

〝フード・テイスティング〟のシステムを設けたことについて、エルスト氏は次のように語っている。

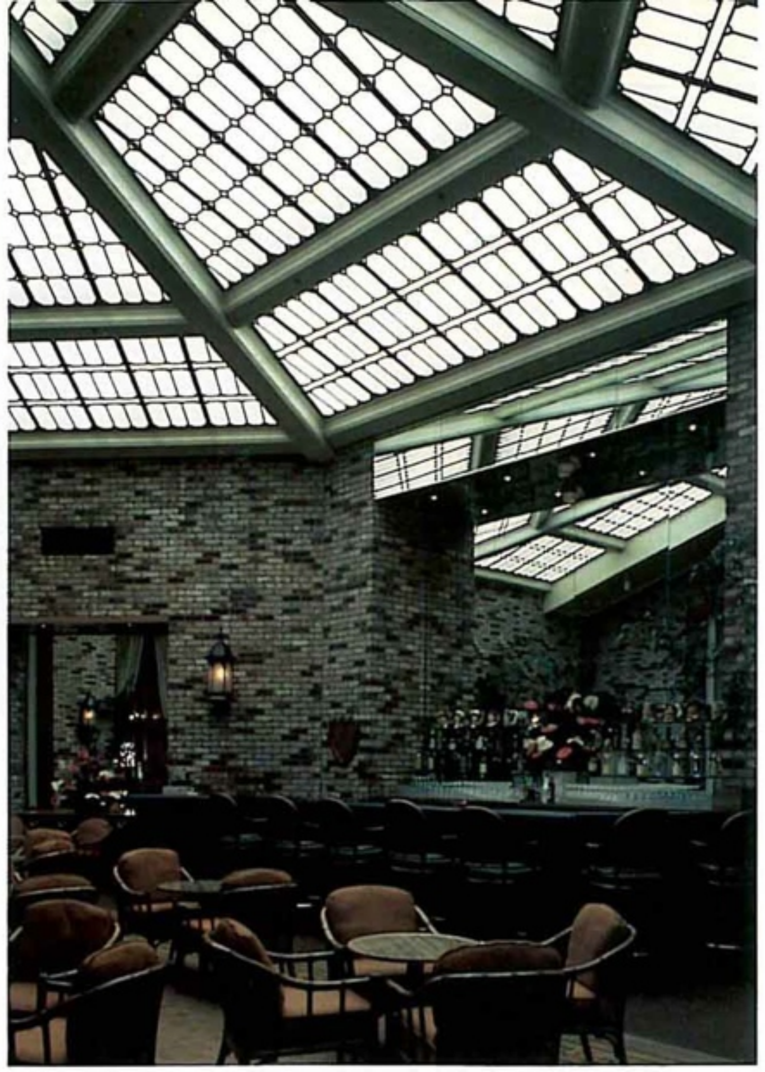
「レストランは、利用する人のためにあるのであって、ゼネラル・マネジャーやフード&ビバレージ関係者の自己満足のためにあるのではありません。そして、レストランはその特徴とレベルをきちんと守っていくこともひとつの義務だといえます。つまり、ホテルと街、レストラン関係者、お客さまも含めての相互作用の中で育んでいくべきものだと考えているのです。

ホテルの宿泊客は、よほどのことがない限り街へ繰り出します。この街は観光都市ですからしかたのないことかもしれませんが、なかにはここのレストランのよさがわかっていて、ここで食事をとられる方もいます。しかし、レストランのお客さまの七十パーセントは地元の方々です。この数字が、このレストランの質の高さと特徴を雄弁に語っているのではないでしょうか。私は、このレストランに対する評価と受け止めています。サンフランシスコは四百六十人に一軒の割合でレストランのある街です。常に水準をより高く、斬新なものに挑戦していかないと、すぐに忘れ去られてしまいます。こうした激しい競争市場は私たちをよりよいものへと駆りたてる挑戦的な気持ちにさせてくれます」

ここの料理の独自性についてJ・J・レーベル氏は語る。

「私たちは、ここの料理をヌーベル・カリフォルニアンと呼び、『革新的カリフォルニア料理(Innovative Californian Cuisine)』と称しています。これは素材からして、真にカリフォルニアの特性を追求し、創意工夫していこうという意味が込められています。ですから、フード・テイスティングも、地元の方に批評していただくことはあっても、ニューヨークから批評家を招くことは無意味だと思います。アメリカは大きな国ですから、東と西の違いは大きく、食事にも顕著です。

たとえば、ここでは舌びらめにペトロダ・ソールを使いますが、東海岸ではドーバー・



A.ロアー・バーは天窓から明りをとっている
B.カフェ・ヴィエンナ

ソールです。蟹も違います。東はストーン・クラブですが、我々はダンジナス・クラブを主に使います。ロブスターもメイン・ロブスターも違います。我々の使うロブスターとメイン・ロブスターも違います。これらの素材を生かす調理法も、違ってくるはずです。

したがって、地元の批評家、つまり〝おいしい料理が好きで、比較的頻繁にこの街のレストランに行く人〟を迎えることが大切なのです」

その結果として、サンフランシスコの〝アペタイザー・オブ・ザ・イヤー〟に選ばれた「牡蠣のソテー キャビアのせ(Sauteed Bluepoint Oysters and Sevruga Caviar)」や「スモークト・ラム・ロワン(Smoked Lamb Loin)」等が誕生した。これらのメニューはモランシー氏のオリジナルで、大変に評判がよく、他の多くのレストランでも出されるようになった。

また最近招聘したフランス人のパストリー・シェフが、二百年前から続くレシピを忠実に守った「オリジナル・クレーム・ブルーレ(Original Creme Brulee)」も売り物となっている。これはポール・ボキューズもそのメニューに加えている一品である。

これらクオリティの高さに対する評価も数多く、『エスクァイア・マガジン』誌の「全米ベスト65レストラン&バー」や全国紙『USAトゥデイ』の「20ベスト・レストラン」にも選ばれている。

また、ノブ・ヒル・レストランを特徴づけるもうひとつのものに、ワインの品揃えがある。現在、フランス物、カリフォルニア物を中心に二百十五種を揃えているが、その一翼を担うものに〝ワイン・オブ・アメリカ〟と称するシリーズがある。これは、アメリカ合衆国五十州のうち三十七州でワインを造っていることに興味をもったエルスト氏が、そのすべての州のワインの中から代表的な銘柄を選んで編んだ独自のワイン・リストで、アメリカでも初の試みでもあり、ザ・マーク・ホプキンスにしかないものである。このアイデアはマスコミの関心をひき、『ニューヨーク・タイムズ』紙に取り上げられたこともあった。

このワイン・リストは、原則としてノブ・ヒル・レストランに置かれている。また、ロアー・バーにはリストは置かれていないものの、オーダーがあればその都度サービスする体制をとっているという。

一方、ノブ・ヒル・レストランのちょうど真下、地下一階には朝食・昼食を主体とした〝カフェ・ヴィエンナ〟がある。ノブ・ヒル・レストランはディナーのみなので、この二つを合わせて一対の機能を果たしている形をとっているといえる。

ここでは、手軽に簡単に食事をしたいというお客さまのために、ビュッフェ式の朝食を設けたり、昼食時にはサンドイッチのようなものを多くメニューに取り入れている。人気のあるメニューは、パストラミ・サンドイッチ、クラブ・ケーキ、オリエンタル・チキン・サラダ等である。

ここのメニューは約半年間隔で変えているが、ノブ・ヒル・レストランほどにはさほど季節感を重視するわけではなく、評判のいいメニューは残しながら、主に改良という観点からメニューの見直しを図っている。

また、ザ・マーク・ホプキンスは日本人の宿泊客も少なくないため、朝食に日本食の献立を加える気配りをみせている。「ご飯、みそ汁、魚のバター焼き、香の物、緑茶」と、なかなか本格的である。一年ほど前からメニューの中に加えられており、まだ注文は少ないながらも評判は上々ということである。

創業当初の意志を受け継ぐ〝ティー・ダンス〟等、地元参加のプロモーションの重要性を熟慮

以上のように、一連の料飲関係のあり方に積極的な姿勢をみせるザ・マーク・ホプキンスでは、ホテル自体のセールスプロモーション活動にも力を注いでおり、とくに

コミュニティ・プロジェクト（地元地域への参加）を重視している。

そのひとつに、ホテルがオープンした翌年の一九二七年からスタートし、今に受け継がれている"ティー・ダンス"と呼ばれるチャリティ・パーティがある。月一回、ホテル内のピーコック・コートで催されるこのダンス・パーティは、発会当初からサンフランシスコの社交の中心だった。その雰囲気を偲びつつ、ローカル・チャリティとして再出発したのは一九八三年九月のことだった。その記念すべき再開第一回目のメイン・ゲストは、市の儀典局名誉局長で、ミスター・サンフランシスコと呼ばれるシリル・マグニン氏（氏の父親はマグニン百貨店オーナー、氏自身は当該ホテルの永久居住者でもある）。以来、女優のローレン・バコール、アイススケートのペギー・フレミング、サンフランシスコ市長のダイアン・ファインスタイン女史等々、多彩な顔ぶれがメイン・ゲストを務めている。

このチャリティ・パーティの入場料は十ドルで、千人まで収容でき、主催者はその時々で変わるものの、チケットの手配やバンド、内装等はすべてホテル側でまかなっているという。また、演奏のほうも、当初の七年間を担当して人気を博したアンソン・ウィークス・ジャズ・オーケストラのスタイルを踏襲してドン・ニーリー・ロイヤル・ソサエティ・ジャズ・オーケストラが、ジャズ・ボーカルのカーラ・ノーマンドをフューチャーして当時の雰囲気を再現している。ただ、違う点といえば、ティー・パーティと称した禁酒法時代と違って、今は酒がふるまわれることであろう。

チャリティとしては、このほかにミュージアム・オブ・モダンアート基金や著名人たちの主催する催しにも積極的に参加しているという。

地元とのより深い関わりという点では、年に一度の"ケーブルカー・ウィーク"に供せられる"ケーブルカー・ランチ"もユニークである。これはケーブルカーで働く人、つまり運転手やベル・リンガー（ベルを鳴らす人）の労をねぎらって特別に設けられたもので、中庭やトップ・オブ・ザ・マークでふるまわれる。ケーブルカーとノブ・ヒルは切っても切れない間柄ゆえだろうが、ちなみにケーブルカーが修復工事のために休業した頃、ザ・マーク・ホプキンスも改装を行い、同時期に再開したといういきさつもある。このとき、ケーブルカーの改修費は約六千万ドル、ザ・マーク・ホプキンスの改装費はその三分の一の約二千万ドルだった。余談ではあるが――。

また、フード&ビバレージに絡んだプロモーションも盛んなようである。たとえば、ノブ・ヒル・レストランでは、全米で最も有名な家庭料理研究家ジュリア・チャイルド女史を招いて"ジュリア・チャイルドを囲んでスペシャルディナーを楽しむ会"を催したり、カリフォルニア・ワインの大醸造元モンダヴィ・ワイナリーのロバート・モンダヴィ氏や食通でキャビアを語らせたら右に出る者はいないというクリスチャン・パートシャン氏をゲストに迎えるなど、斯界の第一人者を招いての食事会等を行っている。これらの基本にあるのは、中程度のプロモーションを定期的に行うのではなく、本当に質の高いものを回数は少なくとも確実に催していく方針である。

エルスト氏は語る。

「大きな広告塔に、いかにこのホテルが優れているかをアピールするより、人々にこのホテルの素晴らしさを語り合っていただくほうがはるかにいいと考えていますし、また、そう語って欲しいと思います。パーソナリティとテーマを絞り込み、参加した人が、直接彼と話すことができるということが肝心なのです。レストランでのプロモーションがいくらかかろうとも、もし広告をすればその十倍はかかります。私は、プロモーションは広告を派手に行うより効果があると考えています。

地元の人々は、ホテルのイメージや評価、ときには名称にまで深く関わってきます。サンフランシスコに住んでいる人は、宿泊としてのホテルは必要ありませんが、食事に来たりしますし、ボール・ルームのミーティングにも参加します。そして、このホテルはいいとか、食事がおいしいとかいったりします。私たちはこの言葉が、ホテルのクオリティだと考えているのです」

"ヘルシー・ミックス"なバランスをもった経営方針

ザ・マーク・ホプキンスのほかにも、ノブ・ヒルにはいくつかのホテルがあるが、そのなかでもスタンフォード・コートとフェアモント・ホテルとは、格式の高さや地理的に近いこともあって友好的な関係を保っているという。

たとえば、大規模なコンベンションを受注する場合、三つのホテルが協力体制を敷くことがある。つまり、会議場をフェアモントに、宿泊客を三つのホテルに分散させるスタイルをとる。というのも、ザ・マーク・ホプキンスが四百六室、スタンフォード・コートが四百室、フェアモント・ホテルが七百室と、いわゆるコンベンション・タイプのホテルと比較すると規模が小さいことによる。このほか、ホテル内の諸問題からプロモーションまで、同じノブ・ヒルのホテルとして情報交換を図ることもある。

とはいえ、それぞれ格式もあり、それぞれに異なった持ち味をもつホテルでもあるのは当然のこと。フェアモント・ホテルはコンベンション志向が色濃く、反対にスタンフォード・コートは個人客を中心にしている。ザ・マーク・ホプキンスは、そのちょうど中間的な形で、コンベンションや小さな団体も受けながら、個人客に対しても十分に対応していける体制をとっている。いわば"ヘルシー・ミックス"とでもいうべき、中間くらいのほどよいバランスをもった集客制がザ・マーク・ホプキンスの強みであり、身上なのである。

こうした方向性をとる主な理由には、インターコンチネンタル・グループの一員としてのメリット並びに二割強が外国客という現状、サンフランシスコのノブ・ヒルでコンベンションを望む声、安全性の高い地域特性などが挙げられている。

そして、ホテルのイメージとしては、一貫してヨーロピアン・タイプのホテルを志向している。コンシエルジュを常駐させたり、二十四時間ルームサービスの体制を敷いているのも、よりきめの細かいサービスを志向しようとする表れであろう。

「ノブ・ヒル一番地」のもつ意味

かつてビッグ・フォーと呼ばれた男の一人、マーク・ホプキンスの邸宅をふりだしに、サンフランシスコの発展とともに姿を変え、今やこの地を代表するホテルのひとつとして知られるようになったノブ・ヒル一番地に寄せる市民の心情は大きいものがあるだろう。ザ・マーク・ホプキンスは、近代化の中にも、こうした想いを育み、守っていこうとしている。

そうした佳きホテルの伝統を感じさせるのが、二人のパーマネント・レジデント（永久居住者）の存在であり、その慣習を守り続けてきたホテルの姿勢である。その一人は前述のシリル・マグニン氏であり、もう一人は、エスター・グッドマンという婦人である。彼女は、第二次世界大戦中に夫妻で訪れてから、夫君が亡くなってしまった今日でも、ずっと住み続けている。

また、ザ・マーク・ホプキンスには各国の要人、政財界のトップ・クラス、エグゼクティブが訪れ、常宿としている。国賓としてルクセンブルク国王ご夫妻をお迎えしたこともある（国王ご夫妻とパーマネント・レジデントのシリル・マグニン氏が昵懇だったことから実現した）。各国の閣僚クラスが宿泊することも多く、日本からの顧客にも政財界の第一線クラスが名を連ねているという。

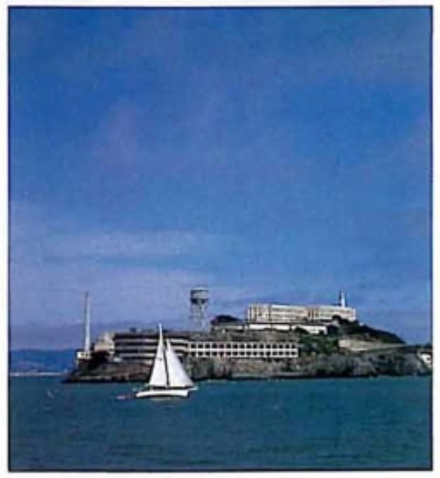
「アメリカ国内・外を問わず、各界のトップクラスの方々や有名人の方がお見えになるということは、ホテルにとってたいへんな宣伝になります。プロフィット・ピクチュア（有名人と一緒に写ったりしてホテルの宣伝に用いる写真）を飾ることが重要だとは思いません。むしろ、こういった方々をお迎えしたというイメージを積み重ねていくことが大事だと思います」

とエルスト氏は語った。

ホテルのPRといった意味では、映画のシーンの中に登場してくることもかなり大きな効果があるだろう。サンフランシスコのランドマークとしても、格式あるホテルの重厚な雰囲気をとっても、いわゆる絵になりやすい場所でもある。アルフレッド・ヒッチコック監督の代表作のひとつ「めまい」の中で重要な伏線のシーンで使っているのをはじめ、スティーブ・マックィーンが主演した「ブリット」、また最近の映画では「ウーマン・イン・レッド」や、今をときめくスティーブン・スピルバーク監督の映画などでもこのザ・マーク・ホプキンスが起用されている。また、アンソニー・クインが「その男ジルバ」の撮影中の三か月間滞在したり、とPRの種には事欠かない。

しかし、あくまでもこのホテルの身上は、カリフォルニアの発展とともにあったノブ・ヒルの伝統をふまえたホテルであるということである。エルスト氏はインタビューの中で、最後にこう強調した。

「ノブ・ヒル一番地に立つザ・マーク・ホプキンスは、サンフランシスコそのものなのです」



A.マーク・ホプキンス邸、左はスタンフォード邸
B.ザ・マーク・ホプキンス・インターコンチネンタル外観
C.サンフランシスコの街並み
D.アルカトラス島

CALIFORNIA TRIVIA カリフォルニア史外伝

⊙全米一荒っぽい土地柄

アメリカ人に、アメリカで最も荒い土地柄はどこかと訊くと、ニューヨークやシカゴにあらず、カリフォルニアという答えが返ってくる。われわれがカリフォルニアという言葉から連想する青い空、陽光さんさんと降り注ぐ大地というイメージからは、まったく正反対のような気もするが、フォーティ・ナイナーズのゴールドラッシュ以来の無法地帯、荒くれ男たちの築きあげた街のイメージが払拭されるどころか、そのルーツとして動かしがたいからであろう。考えてみれば、たった百五十年前の話である。

今回、世界のホテル・バーの項でご紹介したザ・マーク・ホプキンス・インターコンチネンタルを取り巻くカリフォルニア史の中から、土地柄を物語る往時のエピソードをいくつか拾い上げてみた。

⊙一九四〇年代のカリフォルニア見聞録

東海岸一帯の人々の耳目をカリフォルニアに向けさせたのは、一冊の航海記だった。一八四〇年代初頭、当時ハーバード大学の学生だったR・H・デーナーは、北太平洋沿岸で操業する捕鯨船に乗り組み、その様子を『帆船航海記』という一冊の本にまとめ、ベストセラーとなった。その中でデーナーはカリフォルニアの気候風土について克明に描写し、陽光きらめくカリフォルニアは当時の「アメリカ人」の胸に、夢の土地、憧れの新天地のような印象を刻み込んだ。

しかし当時は、まだ黄金騒動もなく、人人にとってカリフォルニアの有用性は、北太平洋の捕鯨業の補給基地としての価値を見いだしたに過ぎない。それから十年も経たないうちに、大転換期を迎えようとは誰も想像できなかったであろう。

ゴールドラッシュを契機に、西へと目を向けられたアメリカの野望は、またたくまに太平洋の覇権へと飛躍していく。捕鯨船の補給基地提供を要求して、黒船四隻を擁したペリーが浦賀に姿を現したのは一八五三年(嘉永六年)のこと。フォーティ・ナイナーズの入植から数えても、たった四年後のことだった。

⊙「土地っ児(カリフォルニアン)」の定義

こんな小唄がある。

「坑夫がきたのは四九年
娼婦がきたのは五一年
そして『土地っ児(カリフォルニアン)』とやらができた」

山の中で何の楽しみもないフォーティ・ナイナーズはばくちに明け暮れ、酒を友とした。五一年に出稼ぎに来た有史最古の職業婦人はカリフォルニアの男たちの十二分の一に過ぎなかったから、相当に競争は激しかっただろう。

アメリカは新しい国である。だからこそWASPのように自己の確立、氏素姓を誇る気持ちは強い。西の新天地で一攫千金を夢みる男に対する、東の蔑視と嫉妬がこのジョークに封じ込められている。

蛇足ながら、当時は、ダンスパーティで女性にあぶれた男たちのために、金を払えば相手をしてくれる女装の男たちもいた。その血筋はしっかりと残って(?)、今やサンフランシスコは同性愛容認の先進地としても名を馳せているのは、周知のこと。

⊙「縛り首町(ハング・タウン)」の住人

フォーティ・ナイナーズが入植したカリフォルニアは確かに無法地帯だった。そこで共同体を作ると、自己顕示と示威行為からその土地に自分たちで命名した。が、新天地らしく町名とは思えないほどに多彩で奔放である。たとえば、

- ・ハング・タウン(縛り首の町)
- ・マーダーズ・バー(人殺し酒場)
- ・ポーカー・フラット(ポーカー場)
- ・ペティコート・スライド(ペティーコートを引き降ろせ)
- ・ヘルス・デライト(健康の喜び)

等々。希望と不安にあふれた開拓者たちが、酒を片手に集まって、ああだ、こうだとやり合っている様子が目に浮かぶ。

ハング・タウンに関していえば、もとはウエーバー・クリークという名の町だった。ところが、チリ人とフランス人の労働者五人組が、強盗と殺人の罪をきせられ、町の有志が組織する鉱区委員会の人民裁判で縛り首になった。以来、〝ハング・タウン〟と呼ばれるようになったが、さすがに今は、〝プレーサービル〟と名を変えている。

⊙隣人の名前

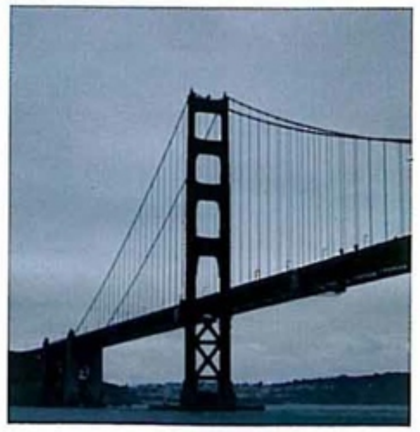
ゴールドラッシュ発祥の地コロマには、世界中からあらゆる人種が集まっていたが、それこそ言葉も通じ合わないようなありさまだったので、個人名を呼び合うほどには意思の疎通はなかったようだ。

そこで、アメリカ東部人は「ヤンキー」、ハワイ人は「カナカス」、メキシコ人は「ソノランス」、オーストラリア人は「シドニー・グックス」、中国人は「クーリー」、ロンドンから来た者は「ライミー」、パリから来た者は「ケスキルディ」と呼ばれた。

金鉱探しにとって、周囲はライバルであり、相手の素性を知り、親しくなることはそれほど必要ではなかったのかもしれない。

⊙墓碑銘

生きている相手に訊いてもお互いに自分自身をあまり語らないくらいだから、死んだ者の氏素性は余計に不明である。フォーティ・ナイナーズの墓はコロマに多く集中しているが、その墓石には「ヤングマンの墓」とか「カンサスから来た男の墓」と書かれているだけ。なかには「友人の墓」というものまである。



⊙加州羅府の日本人

カリフォルニアには日本人も大勢、移り住んだ。彼らは、カリフォルニアやその他の地名に漢字をあてて命名している。たとえば、「加州(カリフォルニア)」、「華盛頓州(ワシントン州)」、「央州(オレゴン州)」、「愛州(アイダホ州)」、「寧州(ネブラスカ州)」、都市名では「紐育(ニューヨーク)」、「市俄古(シカゴ)」、「王府(オークランド)」、「麦嶺(バークレー)」、「羅府(ロサンゼルス)」等々。

あて字、語呂合わせながら、実に巧みなものである。このなかで今でも時折、使われているのは〝紐育〟だが、あとは明治時代の小説の中でお目にかかれるくらいであろう。

⊙ビッグ・フォーの経営したホテル

ビッグ・フォーのうち二人の屋敷がノブ・ヒルでホテルになっている話は本文中で触れたが、それらは彼らの没後のこと。ところが、存命中、彼ら四人は共同でホテルを経営していたことがある。場所はモントレー、名前は「デルモンテ・ホテル」といった。カリフォルニアの土地や交通網を支配し、西部の人々の背中に張りつく〝オクトパス(たこ)〟と呼ばれた彼らが、その権力を誇示するために一八八一年に建てたものである。

このビッグ・フォーの最後の共同事業は火事で全焼しており、その後の四人の不仲を何やら暗示しているようであった。

⊙ペンは財布より重し

ビッグ・フォーの一人、スタンフォードについて二話。リーランド・スタンフォードは、口の重いタイプの人間であったが、商才と蓄財学には人一倍長けていたらしい。そこで彼を悪くいうものの中には、彼のイニシアルの〝L・S〟を〝£・S〟と書いて、「守銭奴」の代名詞のように扱うジャーナリストもいた。

ビッグ・フォーを糾弾した急先鋒は、『イグザミナー』紙。社主は、のちに新聞王と謳われたウィリアム・ハースト。記者はアンブローズ・ビアス。彼は後年、あの著名な『悪魔の辞典』をものした。ビアスはビッグ・フォーの不正融資事件を暴露し、社会的制裁に成功したが、そのとき感想を求められて、こう語った。

「ペンは財布よりも強し」

ちなみに、ハーストが一夜にして名を馳せたのは、前段のデルモンテ・ホテル全焼の徹底取材・報道によってであった。

また、大陸横断鉄道によって東部の文化資本に圧倒された西部が捲土重来を期して東へと攻め入った際の旗頭こそ、このハーストだった。彼のライバルは、ジョセフ・ピュリツァーであった。

⊙スタンフォードのダイエット論

日本でも今、ダイエット・ブームだが、その本場アメリカでは百年余も昔からダイエットが盛んだったらしい。

スタンフォードが中国人の苦力(クーリー)の食生活についてワシントンに、次のように書き送っている。

「中国人苦力の毎日のメニューは、乾したかきやあわび、いか、乾燥筍、マッシュルーム、生野菜五種類、焼豚、鶏肉、バーミチェリー、米、キャベツの塩漬け、乾し海草、砂糖、ライスクラッカー、四種類の果物、中国風ベーコン、ピーナッツオイル等々で、われわれも範とすべき、現代ダイエットの最先端をいくものと考えます」

スタンフォードは、上院議員となってからは体重が二百六十八ポンド(約百二十一キロ)もあったというから、ダイエットには個人的にも非常に関心があったに違いない。

⊙ビッグ・フォーの善行

カリフォルニアンからは、悪辣の限りを極めたオクトパスとみられていたビッグ・フォーも、晩年には善行を施している。

たとえば、スタンフォードはスタンフォード大学を設立、ハンティントンは長年の収集物を寄贈してハンティントン・ライブラリーを設立、クロッカーはクロッカー銀行を残している。

しかし、やはりいちばんカリフォルニアのため、アメリカのためになったのは大陸横断鉄道の建設だとは思うのだが——。

「もちろんあがって一杯やっていくわね?」と彼女が言った。
She had said," You'll come in for a nightcap,of course ?"
(『最後の診断』アーサー・ヘイリー著/永井淳訳/新潮社刊)

表紙のプロフィール

勢 克史(イラストレーター)

一九四五年生まれ。日本デザインスクール卒業後、デザインプロダクション数社を経て、一九七二年に渡米。ロサンゼルス、サンフランシスコ、ニューヨークのエージェント、プロダクションを回る。ニューヨークのプッシュピンスタジオでは、ハルオ宮内氏、シーモア・クワスト氏と会う。以後、フリーランスのイラストレーターとして広告、エディトリアル等にヴィジュアルメッセージを展開する。一九八七年春には、美術出版社よりイラスト・テクニックの技法書を出版の予定である。

『ステア』に関するご意見、ご希望およびお問い合わせは、左記の住所宛てに郵送くださいますよう、お願い申し上げます。
〒162東京都新宿区市谷加賀町一-一-一
大日本印刷(株)CDC事業部
「HBA・ステア編集部」行

When large parties were held in the banquet room, which has a capacity of 600 persons, or in the reception room, which has space for 1250 guests, the chefs handling the food for these huge groups, had to abandon their regular duties in Nob Hill Restaurant, giving others this responsibility, and making it difficult to maintain the restaurant's high quality. Marcel P. van Aelst therefore assigned the management of Nob Hill Restaurant exclusively to the executive sous-chef, Peter Morency. In other words, he has created an independent restaurant within the hotel.

Marcel P. van Aelst says, "I can maintain consistency in the management of this restaurant, by making it an independent operation. When problems occur in the hotel, we do not ask for help from the employees of Nob Hill Restaurant. On the other hand, if happening in Nob Hill Restaurant, we let its employees solve the problems themselves. Nob Hill Restaurant must take good care of their guests treating them even better than the hotel treats its guests. I think this is most important, for any hotel. Any way, this makes distinction between really good hotel restaurants and ordinary restaurants.

This restaurant seats about 100, and it serves only Nouvelle California Cuisine.

San Francisco has 94 restaurants per square mile, the highest density in America. Naturally, the tastes of the people of San Francisco have become used to gourmet cooking, and the competition between restaurants is fierce. Marcel P. van Aelst has created a system called "restaurant tasting" to maintain the great popularity and to increase the quality, of Nob Hill Restaurant, in these severely competitive conditions.

Nob Hill Restaurant changes its menu every 3 or 4 months, in order to serve high-quality dishes using the freshest ingredients. Prior to making the final decisions on the menu, several outside guests, and the restaurant staff, have a menu tasting, at which they exchange opinions, taking sufficient time for thorough discussion, from the arrangement of food on serving dishes, to the quantities and cooking methods. Results of these discussions are reflected in the new menu when it is adopted. Guests attending these tastings include politicians, businessmen, and other lovers of gourmet food. They are mostly local people. Concerning the reasons for the establishment of the "restaurant tasting" system, Mr. Aelst says, "A restaurant exists for the people who patronize it, not for the self-satisfaction of the general manager and the food and beverage staff. One of the restaurant's duties is to maintain its distinctive features and its level of quality. I think that a restaurant must grow through the mutual interactions between the hotel, the town, and the people involved with the restaurant, including its guests."

Outside Terrace in a suite

San Francisco downtown from The Mark Hopkins

In this way, the "restaurant tasting" is the dish chosen as "Appetizer of the Year" in San Francisco: Sautéed Bluepoint Oysters and Sevruga Caviar (with Lemon and Chive sauce). Another is the original dish also created by Executive Sous-chef Peter Morency, "Smoked Lamb Loin (with Roast Garlic and Lamb Glaze)". Both of these have become very popular, and have been served in many other restaurants.

There are some dishes, however, which you can eat nowhere else but in Nob Hill Restaurant. One is the original "Creme Brulée", a beautiful reproduction of a two hundred-year-old recipe, prepared by a French pastry chef invited from New York. This dish was served Paul Boceuse's own establishment.

Nob Hill Restaurant has its own small herb garden on the Mason Street side, in which about 30 kinds of herbs are grown. These herbs are effective in creating the unique tastes of the dishes which can only be enjoyed in Nob Hill Restaurant.

"Wines of America" has noted that Nob Hill Restaurant is also distinctive in another way. Marcel P. van Aelst was interested in the fact that 37 of the 50 states of the U.S.A. produce wines, and he selected typical wines from each state to create a distinctive wine list. This is the first of its kind in North America, and can be found only at The Mark Hopkins. This idea drew the attention of the media, and led to an article in the New York Times.

Nob Hill Restaurant was selected as one of the 65 best restaurants and bars in America, by Esquire magazine, and chosen as one of the 20 best restaurants by U.S.A. Today, an American newspaper with nationwide circulation. Of course, there is no doubt that these selections were made because of the high quality Nob Hill's menus.

The Cafe Vienna, on the first basement level, right below Nob Hill Restaurant, is open only at breakfast time and lunch time, complementing the schedule of the other restaurant. A buffet-type breakfast is served here, for the customer who likes to eat simply, in a short time. A variety of foods, such as sandwishes, is prepared for lunch. Popular meals on the menu here include pastrami sandwiches, crab cakes, oriental chicken salad, etc.

The menu here is changed about every six months. The season is not considered an important aspect for menu planning here, as it is by Nob Hill. Popular meals on the menu are retained, and changes in the menu are made from the viewpoint of improvement, not according to the season.

The Mark Hopkins has a relatively higher number of Japanese guests, than other hotels in the Nob Hill area, such as Fairmont Hotel, Stanford Court, etc. Because a large number of Japanese businessmen stay at The Mark Hopkins, the hotel prepares a Japanese breakfast, which is quite authentic, for example miso soup, fish grilled with butter, steamed rice, Japanese pickles, and green tea. This Japanese breakfast was added to the menu about a year ago. The numbers of orders for it are still relatively low, but it does seem popular.

Numerous activities, including "Tea Dance", since the hotel was established.

Many tourists visiting America, seem to spend all their time outside the hotel, and come back to the hotel only to sleep, and many hotel guests do not eat in the hotel. Mr. Aelst points out that the hotel itself lacked attractions. He therefore tried various promotional activities to make The Mark Hopkins more attractive. As one of those activities, the "Tea Dance", has continued until now, from its beginning in 1927, during the Prohibition Era, in a year after The Mark Hopkins opened. This dance party, held once a month in the Peacock Court, was the center of San Francisco society when it began. Anson Weeks and his orchestra were responsible for the music for these dances, for the first seven years they were held. The band today still plays the same style of music.

Don Neely's Royal Society Jazz Orchestra, with Carla Normand on vocals, reproduce the music played by Anson Weeks' orchestra at those days. A wide variety of guests attend these tea dances, for example Cyril Magnin, the Chief of Protocol for San Francisco, Lauren Bacall, Peggy Fleming, Mayor Dianne Feinstein, etc. A different point of these parties from those days is that the "Tea Dance" is now held as a charity presentation, and play a role in deepening the hotel's connections with the local area. The admission fee is ten dollars, and a maximum of 1,000 persons may participate. The sponsor of this charity dance changes for each occasion, but the preparation of tickets, the band, and interior decorations, etc., are all handled completely by the hotel.

The hotel is also actively involved with other charity events in San Francisco, including fund-raising for the Museum of Modern Art, which has become a great sensation, and charity presentations sponsored by famous persons.

One activity which leads to deeper relationship with the local area, is the "Cable car lunch", presented annually during "Cable Car Week", for all those who work on the cable car system, the drivers, bell ringers, etc.

The Nob Hill Restaurant holds promotional activities with experts in many areas as guests; for example, the special "Dinner Party with Julia Childs", with the home cooking expert, Julia Childs. Others have included Robert Mondavi of the Mondavi Winery, and the "King of Caviar", Christian Pertochan. Nob Hill Restaurant does not hold an average-quality presentation every month, showing people the same thing every time. They will have truly high-quality activities each time, even fewer events.

The hotel has also appeared in many motion pictures, such as "Vertigo", directed by Alfred Hitchcock, "Bullitt", "The Woman in Red", and the movies of Steven Spielberg. These could be very significant as promotion for the hotel.

THE MARK HOPKINS STANDS AT THE TOP OF SAN FRANCISCO

There are fewer and fewer hotels these days, which have permanent residents, but The Mark Hopkins does have two. One is Mr. Cyril Magnin, also called "Mr. San Francisco", honorary Chief of Protocol for San Francisco. The other is Mrs. Esther Goodman, who has lived here since 1943, with her husband, who has already died. These permanent residents are distinguished additions to the hotel.

Many VIPs visit The Mark Hopkins. Guests of the state, such as the Grand Duke and Duchess of Luxembourg, and govenment ministers from many nations, have been accommodated here.

Many people from Japan have stayed at this hotel, including many VIPs from both the political and financial spheres, such as Japan's Minister of Finance.

Marcel P. van Aelst says, "When VIPs and famous persons, regardless of whether they are American or from foreign countries, visit our hotel, this becomes very good advertising for the hotel. I do not consider the profit picture so important. Rather, I feel that people pay attention to the image evoked by the fact that our hotel has entertained these guests. This is more important".

Mr. Aelst is filled with enthusiasm and pride in being the general manager of The Mark Hopkins. I asked him one last question, about the relationship between San Francisco and The Mark Hopkins, He replied as follows, "I would almost say The Mark Hopkins is San Francisco".

Leland Stanford, a lawyer in New York, was asked by his older brother to join him in California. Stanford and his older brother opened a shop which handled gold-mining tools, food, and general merchandise. Stanford was also a Republican Stanford differs from the previous three men in that he had never prospected for gold himself. These 4 Republicans, who came to California at almost the same time as the '49ers, were all talented businessmen, and were almost identical in age. They later became important forces in the construction of the trans-continental railway, and were the most successful men in California, known as "The Big Four".

As everybody knows, San Francisco now flourishes as a gateway to the United States. The beginning of this development was not actually the gold rush; but a trade link with the east. However, for a while after the completion of the trans-continental railroad, which connected the west coast with the eastern states, California suffered unanticipated problems, due to the huge economic disparity between California and the eastern United States. There was a continuing series of retail bankruptcies, as both raw materials and finished products poured in from the eastern and central United States. Newspapers, too, were not at all competitive with the superior eastern printing technology.

In contrast, the eastern states gained a great advantage, since they were able to use the fine natural harbor in San Francisco, which they had long for many years as a footing to foreign trade with east Asia.

Four men – Stanford, Huntington, Crocker, and Hopkins – became the most powerful in California, with the construction of the trans-continental railroad. Known as "The Big Four", they quickly noted the importance of San Francisco, which was becoming the main western gateway to the United States, and made plans to get the ownership of the entire transportation system around San Francisco.

In 1865, in the midst of construction of the trans-continental railroad, they planned a route from Sacramento to San Diego, and established the Southern Pacific Railroad. The railroads from the southern and mid-western states, were mostly aimed at California. The Southern Pacific Railroad went toward the south, monopolizing the railway rights, and it was extended to New Orleans.

The Southern Pacific Railroad succeeded in gaining control of the complete railroad network in the whole western half of the continent, by combination with the Central Pacific Railroad in 1884, to create a new and larger Southern Pacific Railroad, and the basis of today's railroad system.

The assets of "The Big Four", who controlled 9,000 miles of railroad, operated a steamship company, and owned hundreds of acres of land, can be estimated at approximately $65,000,000 in the early 1870s. By the end of the 19th century, these four men controlled an amount of land which had increased to one fourth of all land in the entire state.

A | B / C

A. Nob Hill Restaurant
B. Nob Hill Restaurant —Wine Bar
C. Lower Bar

"THE NOBLES' HILL" LOOMS UP IN THE SAN FRANCISCO FOG

As you ride the cable car through San Francisco's dense fog from downtown, it takes you to the small hill known as "Nob Hill", where many high-class hotels stand side by side.

Nob Hill used to be a high-class residential area, where the successful people of California gathered. It is still a symbol of California, which reveals the early pride in it, through its very name: Nob Hill is an abbreviation of "Nobles' Hill".

The cable car system, a popular San Francisco attraction, was established in 1873, as a mode of transportation which would connect Nob Hill with the downtown area. Ten cable car routes spread between Nob Hill and the downtown at the peak, but only three routes remain today.

Stanford was one of those who resided on Nob Hill. He built a huge mansion on the Hill, for the son on whom he doted, from which they could look down on foggy San Francisco.

Mark Hopkins and Colis Huntington also built their mansions in the Nob Hill district.

Nob Hill was most suitable for "The Big Four", who reached the heights of power in California. The mansions of these three men still remain, but as hotels. Stanford's residence became Stanford Court (introduced in Issue No. 7 of this magazine), Huntington's residence became the Huntington Hotel, and Mark Hopkins' mansion became The Mark Hopkins Inter.continental. Each of these hotels is proud of its high status.

Mark Hopkins' home was built for his wife, Mary. This most luxuriously decorated residence was located in the south-eastern part of Nob Hill. It was completed in 1878, but Hopkins could not enjoy it, as he died a few years before it was completed. His wife, Mary stayed here for only 2 or 3 years, then returned to her old home in Massachusetts, at the age of 73. She then married Edward Searles, an interior decorator 30 years her junior. She died in 1891, soon after her marriage to Searles, and left an enormous estate worth $70,000,000. Her new husband, Edward, who succeeded to her fortune, donated the land and the mansion on Nob Hill, which had been included in the estate he inherited, to the Art Association of San Francisco, in 1893. His hope was that a school and museum would be built here.

San Francisco has had many strong earthquakes, but this durable mansion survived them all, included even the Great Earthquake of 1901. The house, however, was later burn down leaving only its foundation and chimney. Several years later, a school was built, in accordance with Searles' wishes.

George D. Smith was a mining engineer who also carried on a business involving real estate. One day he was walking around Nob Hill, and passed the school. He began to think about building a hotel on the site, because of its excellent location. From here it is possible to see both downtown and San Francisco Bay at first sight. He bought the land in 1925, and the Mark Hopkins opened on December 3rd of the following year, an 18-story hotel designed so that every guest room enjoyed a beautiful view.

In 1962, prior to his retirement, Smith sold the hotel to the financier, Louis Lurie. Lurie sold the surface rights for a ten-year period, in 1973, but continued to maintain ownership. At present, the land and the building are owned by Bob Blury, who also owns the San Francisco Giants team. The Inter-continental possesses only the borrowing rights, until the year 2063. This elegant hotel, even though it is relatively small in size (20 stories, 406 rooms) and was built 100 years ago, inherits both the image and the status of Mark Hopkins, one of "The Big Four".

"TOP OF THE MARK": A SAN FRANCISCO SYMBOL

"Top of the Mark" was originally a lounge built as part of the penthouse added to the hotel in 1932. From here, there is a panoramic 360° view, which is world-renowned. "Top of the Mark" has become a tourist attraction all tourists hopes to visit once at least.

During World War II, this spacious lounge was the scene of much passionate emotion, since it had become the custom for soldiers and sailors departing from San Francisco Bay, to have a last, parting drink here with their families, their lovers and their friends. Soldiers would leave from "Top of the Mark" to board their troop ships, while their friends and relatives stayed in the lounge seeing off until the ships' disappeared. Even now, 40 years after the war's end, many businessmen visit here for their memories.

"Top of the Mark" has no kitchen, because no dinners are served here, but its seafood wagon serves a wide variety of clam, oyster, and shrimp dishes in the bar, during the evenings. On Sundays, brunch is also served, from 11 a.m. to 3 p.m.

The Lower Bar, in the hotel lobby, is a lounge which is open from 11 a.m. to 1 a.m. There is entertainment every night, from 9 p.m. until closing; not just piano playing – guests can gather around the piano and sing, enjoying this bar's relaxed feeling. During the daytime, cocktails, snacks, and light meals, are served, and afternoon tea starts at 2:30, when you can enjoy scones and French pastries.

NOB HILL RESTAURANT MAINTAINS THE HIGH QUALITY

Top of the Mark symbolizes The Mark Hopkins, and on the other hand, Nob Hill Restaurant, on the first floor of the hotel, embodies the extremely high quality of The Mark Hopkins Hotel. Marcel P. van Aelst was appointed as general manager of The Mark Hopkins in 1983. Since then, Nob Hill Restaulant has been receiving high praise to raise its quality even higher. He has, however, adopted a system of complete separation of Nob Hill R-estaurant from the regular hotel kitchens.

HOTEL BAR IN THE WORLD

"TOP OF THE MARK"

THE MARK HOPKINS INTER·CONTINENTAL, SAN FRANCISCO

	A
B	C
	D

A. Mr. Marcel P. van Aelst (General Manager)
B. Mr. Jean-Jacques Reibel
(Food & Beverage Manager)
C. Miss. Julie Bruzzone (Press Relations)
D. Mr. Gregory Frates
(Top of the Mark/Assistant Manager)

Top of the Mark

When you look down San Francisco Bay from Nob Hill, you have an expansive view of the entire area, with the Golden Gate Bridge, Oakland, and the piers – unless the view is blocked by that famous San Francisco fog!

San Francisco Bay, undiscovered until the end of the 16th century because of this capricious fog, was the ideal inlet for a port. The gold rush in the mid-19th century, and the development of San Francisco as a trading base for the Pacific area, realized the trans-continental railway which connected the east and west coasts of the North American continent. And San Francisco experienced great expansion as the most important city till now. The leaders of its early progress, the men of power in those days, who were known as "The Big Four", built their residences on Nob Hill, the finest residential area in San Francisco, to show their power. Their huge mansions have now become high-class hotels. Of these Nob Hill hotels, The Mark Hopkins Inter.continental, which is far superior to other hotels, with its established formality and splendidly grand view, will be introduced in this articles.

THE GOLD RUSH: WESTWARD-BOUND TRAVELLERS IN SEARCH OF "EL DORADO"

Geographic obstacles around San Francisco include the Sierra Nevada mountains, in the east side of San Francisco, and the desert area called Death Valley. The Sierra Nevada mountains are a steep mountain chain, reaching 13,000 feet above seal level, and including the 15,000 feet the Mount Whitney.

The deep snow on the Sierra Nevada in winter, makes it extremely difficult to cross these mountains. Death Valley is 282 feet below sea level, the lowest spot in all of the United States. This great desert area extends for about 40 miles (from west to east) and about 300 miles (from north to south) on the south side of the Sierra Nevada mountains. This is a completely sterile zone, with a temperature in excess of 120°F in summer.

When these delay in development of the area of the United States farther west than the eastern side of the Sierra Nevada mountains, was entirely reasonable. In the 19th century, people finally ventured a move over. Because the legend of El Dorado they had heard in the mid 16th century realized.

Alluvial gold dust was discovered near Fort Sutter [owned by John Augustus Sutter, (1803–1880)], resulted in the beginning of the "gold rush". Sutter's "right-hand man", W. Marshall, discovered this alluvial gold in January of 1848, at Coloma, in a branch stream of the American River, when he was in the area to cut timber. The news of the discovery of the gold vein spread instantly in California, and reached in New York in August of 1848. In "California Correspondence", in the Herald newspaper, which had the largest circulation in New York. El Dorado was no longer a legend or a rumor, so there was no reason for the discovery of this gold vein not to be the detonator which set off the gold rush.

Immediately, numerous companies, from large ones with 150 or more stockholders, to small ones with just over a dozen stockholders, were established to carry out gold mining as a business. All these companies chartered ships and went off to California. A total of 775 ships were hired in eastern cities, and all these ships were packed with their dreaming of making a fortune at one stroke. There were also nearly a hundred thousand people who travelled overland to California. The travelling expense was cheaper than the sea voyage, but the suffering involved in crossing Death Valley and the Sierra Nevada mountains was far beyond imagination. It was possible to make a detour southward and go through Texas or Arizona instead of taking the route across the Sierra Nevada, but this made the 3,000 miles long journey.

In various ways, over 130,000 people arrived in California in only 1849. These are the so-called "'49ers". The population of California at that time was less than 10,000. This population increased over 13 times in just one year, and this had doubled again two years later, to 260,000.

THE TRANS-CONTINENTAL RAILWAY AND THE RISE OF "THE BIG FOUR"

With more than 200,000 people rushing in, looking for gold, even the vastly huge gold vein which spread toward the east side of the Sierra Nevada mountains, could not make all of them satisfied. In 1848 it was possible for one person to collect a pound of gold per day, but, 2 years later, prospectors were able to collect a mere 5 dollars' worth, so not many became wealthy. The most successful were the suppliers of goods to the prospectors, taking advantage of the gold rush boom.

Charles Crocker was one of these suppliers. He started a cartage business to carry food and materials and equipment for mining, from Sacramento to the mining camps in the mountains. When he had saved enough, he opened a grocery in Sacramento, and also joined the Republican Party.

Coris Huntington also became a merchant in Sacramento, handling gold-mining tools for the '49ers.

Mark Hopkins, Huntington's partner, was also the founder of a blanket storage business. Both were also Republicans.